

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

337

424



中將山室軍平著

(第二十二版)

基督傳の教訓

東京神田 救世軍出版及供給部

始



特210
22



中將山室軍平著

基督傳の教訓



基督傳の教訓

序

「永遠の生命は、唯一の眞の神に在す汝と、汝の遣し給ひし耶穌基督とを知るにあり。」又「我はわが主基督耶穌を知ることの優れたる爲に、凡ての物を損なりと思ひ、彼の爲に既に凡ての物を損せしが、之を塵芥の如く思ふ。」などとあり。如何に信仰生活に取りて、耶穌基督を知ることの必要なるかを、察せらるゝではないか。

此の書は、基督傳中の主要なる事實に就きて、その心靈的、實行的の教訓をたづねた、言はゞ一種の感話説教集の如きものである。十年前「通俗基督傳」の名で、公にして以來今日まで、相當に各方面に歓迎せられ、基督敎主義の或る中等學校では、之を其の倫理の教科書に採用したのもあつた。

折柄先頃の大震災火災に際し、此の書の紙型全部を印刷所で焼失し、今一度改版

を餘儀なくせられたのを機會に、その全篇に互りて、及ぶ限の訂正を試み、前よりも一層、内容に該當するかと覺しき、「基督傳の教訓」といふ書名の下に、改めて之を世に出すことゝなつたのである。

幸に此の書が、尙も用ゐられて、殊に我が大多數の民衆に、耶穌基督を知らしむるの一助たるを得たなら、著者の喜之に過るはないのである。

大正十二年十月

著者

昭和六年五月紙型が損じた爲に今一度版を改むることゝなつたのである。(著者)

基督傳の教訓

目次

第一章	ユダヤの國(ヨハ四・二二).....	一
第二章	天使の示現(マタ一・二二).....	九
第三章	誕生(ルカ二・六、七).....	一六
第四章	幼年時代(ルカ二・五二).....	二五
第五章	田舎大工(マル六・三).....	三一
第六章	野に呼べる人(ルカ三・四).....	三八
第七章	野の試練(ヘブ二・一八).....	四五
第八章	カナの結婚式(ヨハ二・二).....	五三

目次

一

第九章	ニユデモ(ヨハ三・三).....六〇
第十章	サマリヤの女(ヨハ四・三二).....六八
第十一章	歸省(ルカ四・二四).....七六
第十二章	人を漁る者(マタ四・一九).....八三
第十三章	山上の説教(マタ六・九).....九〇
第十四章	十二使徒(マタ一〇・一六).....九八
第十五章	弱者の友(マタ一八・一四).....一〇五
第十六章	種蒔の喩(マタ一三・三五).....一一二
第十七章	奇蹟(マタ一四・一四).....一一九
第十八章	生命のパン(ヨハ六・三五).....一二七
第十九章	變貌山(ルカ九・三五).....一三五
第二十章	活ける神の子(マタ一六・一六).....一四二

第廿一章	不義者(ヨハ八・七).....一五〇
第廿二章	善きサマリヤ人(ルカ一〇・二七).....一五七
第廿三章	貞潔(マタ五・二八).....一六四
第廿四章	兒童(マル一〇・一四).....一七二
第廿五章	凡ての者の僕の僕(マル一〇・四四).....一七九
第廿六章	放蕩息子(ルカ一五・一〇).....一八六
第廿七章	上京(ルカ一九・四〇).....一九三
第廿八章	國家と宗教(マタ二二・二二).....二〇〇
第廿九章	晩餐(ヨハ一三・一四).....二〇七
第三十章	ゲツセマネ(マタ二六・三九).....二一四
第卅一章	十字架(マタ二七・四〇).....二二一
第卅二章	復活(ヨハ一七・二五).....二二八

基督傳の教訓

山室軍平著

第一章 ユダヤの國

参考【マタイ傳一章一節至十七節】

「救はユダヤ人より出づ」(ヨハ四・二三)

百姓が稻を作るには先づ苗代にて苗を育て、それを他の田地に移し植ゑる如く、神様は其の昔ユダヤといふ小さな國を苗代とし、そこに世界人類の救主なる耶穌基督を生れしめ、そこに有難い神様の御教の種を蒔き、そこから取つた福音の苗を、追々萬國萬民の間に移し植ゑさせ給ふこととなつた。「救はユダヤ人より出づ」というてあるのは、其の事である。

ユダヤといふ國は亞細亞の西の端にあり、我が日本の四國と同じ位の廣さである。其の位置は西北に歐羅巴を眺め、西南には亞弗利加を控へて居る。つまり歐羅巴と亞細亞と亞弗利加と、三大陸の間にあつて、小いながらも何彼につけ、其の三大陸の性質を一纏めに備へて居るといふのが、ユダヤの國の特色である。其の氣候から言うても、風土から觀ても、動植物の狀態から考へても、ユダヤは立派に歐羅巴、亞細亞、亞弗利加の三大洲の小さい雛形見た様な趣がある。而して神様が此うした珍らしい、恰好な國を見立て、宗教上の苗代となし、そこに育つた基督教の苗を、廣く世界萬國に移し植ゑさせ給ふたのは、如何にも興味のある話である。

ユダヤ人の先祖はアブラハムといひ、今からこれ四千年も前に、其の地方に移住して來た人である。アブラハムは世間の人が専ら偶像邪神に事へて居る時代に、逸早く獨一の眞の神様を信仰した人であるが、それではどうしてアブラハム

が斯く眞の神様を信仰する様になつたかといふ事に就いては、面白い言傳が遺つて居る。其の頃アブラハムは、木佛金佛など拜むのは馬鹿らしいことだと心付ながら、まだ其の代に拜むべき眞の神様の事を知らなかつた。或夜外に出て燦爛たる天の星を眺め、思ふ様「此の不思議な星は日頃求むる神様ではあるまいか」と、これを拜んで居る最中、忽ち大な月がぬつと顔を出した。「これは星よりも大い上に明いから、同じ神様として拜むならば、此の方が優であらう」と、アブラハムは其の夜一夜、一心に月を拜んで居ると、其のうちに東の空が白み、今度は威勢の好い太陽が雲を破つて躍り出た。「待てよ、これは又月よりも一段と大きくて、明く、お負に暖いから、これを神様として崇めるに如くはあるまい」と、其の一日太陽を拜んで居ると、夕方になつて、其の太陽が亦西の山の端に姿を隠した。「これでは何うも心細い、どうせ拜む程なら、晝といはず、夜と言はず、いつても斷間なく、守つて下さる神様を拜み度ものである」と。此ういふことからアブラ

ハムは、終に星でも、月でも、日でも、または山でも、河でも、草でも、木でも、禽でも、獸でも、人間でも、一切の物を造つて之を支配し給ふ、獨一の眞の神様の御存在なさる道理を發明し、眞實をこめて一生涯之にお事へ申す様になつたのださうである。アブラハムの子はイサク、イサクの子はヤコブ、此のヤコブに十二人の男の子があつて、後に十二の種族の先祖となつた。其の時分に大な饑饉があり、一同は食を求めて埃及の國に移り、引續き四百年ばかりも其の國に住むうち、其の國民から憎まれ、果ては奴隸として虐待を蒙ることゝなつたが、其の時神様はモーセ、ヨシユアなどいふ豪傑を起して、之を埃及の國から救ひ出し、當時のカナン、即ち後のユダヤの地方に導き、そこを永住の所と定めさせ給うた。此のモーセは又神様の教を授かり、色々と貴き律法を定めしたが、中にも十誡といふのは、今日迄も大切なる神様の御誡として、重んぜられて居る。即ち左の如し。

- 一、汝我が面の前に我の外何物をも神とす可からず。(眞の神様の外の者を神と崇めてはならぬ事。)
- 二、汝、自己の爲に何の偶像をも、彫むべからず。(偶像邪神を拜んではならぬ事。)
- 三、汝の神エホバの名を妄りに口にあげ可からず。(神様のことを不眞面目に口にしてはならぬ事。)
- 四、安息日を憶えてこれを聖潔くすべし。(七日に一日を禮拜日として守る事。)
- 五、汝の父と母とを敬へ。
- 六、汝殺すなかれ。
- 七、汝姦淫するなかれ。
- 八、汝盜むなかれ。
- 九、汝、その隣人に對して、虚偽の證據を立る勿れ。(嘘をいうてはならぬ事。)

十、汝、貪る勿れ。

此のモーセの律法といふものは、ユダヤの人民の信仰心を養ふ上に、大なる影響を及ぼしたものである。

アブラハムから千年程後に、ダビデといふ人が現れた。これは牧者から起つて、其の國の王となつた豪傑であるが、亦極めて信仰の篤い人で、其の作つた詩歌は、今も聖書の中に多くつて居る。其の子ソロモン王の治世は、其の國の全盛時代にて『ソロモンの榮華』といふ語が、後の世迄も傳はつた位である。間もなく國は南朝北朝の二つに分れ、お負に外國から度々攻寄せられ、國民は一度ならず、捕虜となつて他國に連れ行かれた様なことさへあり。領分は縮まる、人民は流離になる、終には全く獨立を失うて、ロマの屬國となつてしまつた。これは救主イエスキリストが御誕生になつた、三十年餘前のことである。其の間人民の信仰心には斷えず浮沈があつたが、それでも「人窮すれば則ち元に反る」習國が亂れ、敵に

は無慘な扱を受け、又は捕虜となつて、見も知らぬ異國の空に彷徨ふ如き場合になつては、大概いつでも先祖達の信仰した神様の事を思ひ出し、謙遜つて其の御助を祈り求めたものである。殊に國家の運命がそろく危くなりかゝつて後、引續き現れた預言者といふ人達の中には、神様が程なく一人の特別なるお方を世に遣つて、憐れなる人民を救ひ給ふこと、又今にも其のお方がお出になる筈だといふ様なことを、教へたものが多くあり。心ある人々は一般に、神様の許から其の特別なるお方がお出になる日を、今か今かと待ちこがれて居る様なありさまであつた。

ひとりの嬰兒我等の爲に生れたり、我等は一人の子を與へられたり。政事は其の肩にあり。其の名は奇妙、又議士、又大能の神、永遠の父、平和の君と稱へられん。其の政事と平和とは増加りて窮なし。且ダビデの位に座りて其の國を治め、今より後永久に公平と正義とを以て之を立て、之を保ち給はん。萬軍の

エホバの熱心之を成し給ふべし。(イザ九・六、七)
 これは昔の預言者が、やがて神様から遣らるべき特別なる方、即ち救主の事を、前以て教へて置いた中の一例である。

斯る時しも救主耶蘇基督は、乃ち世に現れ給ふ事となつた。耶蘇基督は常にユダヤの人民とのみならず、遍く世界の人類が假令口にはそれと明かに言ひ得ず共、實は一日千秋の思を以て、待ちこがれて居る所の救の恵を與へん爲に、此の世に降り給うた御方である。耶蘇は罪に滅ぶる世の人を救ひ、神の御國を此の世界に打建ん爲に、神様から特別に遣された其の御獨子である。マルタといふ婦人が後に「我汝は世に臨るべき基督、神の子なりと信ず」というたのは、如何にも適切なる宣言であつた。

第二章 天使の示現

参考【マタイ傳一章十八節至二十五節】

「汝其の名を耶蘇と名づくべし、己が民を罪より救ひたまふ故なり。」(マタイ二二)

神様の御獨子耶蘇基督が、人間の姿をとつて、世に現れ給うたのは、今から千九百餘年前、我が朝の垂仁天皇の御代のことである。其の頃神様の御靈は清き處女マリヤといふものゝ胎に宿り給うたが、そんな事とは知らぬ聘定の夫ヨセフは、其の意を解し兼ね、多分マリヤが不義密通でもしたのであらうと思ふ故、竊と其の聘定をやめて離縁し様と考へて居る時、或夜天の使はヨセフの夢に現れて、「ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るゝことを恐るな。其の胎に宿る者は聖靈によるなり。彼子を生まん、汝其の名を耶蘇と名づくべし。己が民をその罪より救ひ給

ふ故なり。」と、示されたので、ヨセフは始めて事の次第を曉り、大事にマリヤをいたはつて身二つにならせたが、其の生み落した男子が即ち耶穌基督であつた。天の使はマリヤの胎に宿つて居る兒童の事に就き、「汝其の名を耶穌と名づくべし、己が民をその罪より救ひ給ふ故なり」と申した。「耶穌」といふのはギリシヤ語で、これを日本語に直せば、「救主」といふ様な意味である。即ち神様の御獨子耶穌は、名詮自稱、世の人を罪の中から救ひ出さん爲に、態々人間の姿をとつて此の世に現れ給うた御方である。

然らば罪とは何か、又耶穌基督が人を罪から救ひ給ふとはどういふことかと、考へて見るに、聖書に「凡ての不義は罪なり。」「人善を行ふことを知りて之を行はぬは罪なり。」又「凡て信仰によらぬ事は罪なり」などとあり。人が何でも自分勝手の事を行ひ、神様の思召を思はず、人の爲を考へず、本心のとがひる悪事をなし、又は善事と認むる所を行はないのが、凡て皆神様の前に罪である。而して

人は皆、いつでも此うした罪のみ犯して居る故に、胸の中には心配苦勞の絶間がなく、さまざまの苦勞難儀を我が身に招き、他人に良くない模範を見せた上に、飛んだ迷惑を周囲の人々に及ぼして居る。罪人は亦未終に浮む瀬もなき滅亡に墮つべき筈のものである。人間世界の一切の禍は、皆人の犯せる罪から起るもの故、私共は何はさて措き、先づ自分を罪より救ひ、進んでは亦他人を罪より救ひ出さん爲に、力を盡すべき筈である。

然るに復考へて見れば、人は自分で自分を罪から救ひ出す力を有つて居ない。即ち昔王陽明が「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」といひ。又マルチン・ルーテルが、「我は羅馬法王よりも、大僧正よりも、我が心を懼れる。なぜかといふに、我が心の中には、己といふ羅馬法王が跋扈して居るからである」というたのは、皆此の罪の力の勝ち難いことを言うたものである。或る舊い書物に、角力取の繪をかいて其の上に、「負けることをば嫌やるげなが、なぜに慾にはよう

勝ぬ」と記してあつた。

兎角他の事には負け嫌の人間が、自分の我儘氣儘にばかりは、見苦しい敗北をして居るのが、世の習である。然らば私共は如何にして、其の罪の力に打ち勝つ可きかといふに、それは救主耶穌基督にお縋り申上げ、其の御助を求むる他に方法はない。

神様の御子耶穌基督は、人を罪から救ふ救主である。といふ意味は、第一、耶穌は私共の過去に犯せる罪を赦す方である。人は皆物心がついてから今日迄、其の本心にとがむる多くの悪を行ひ、善と氣付いた事を行はず、神様の御前に山なす罪を重ねて居る。併しながら私共が若し悔改めて耶穌を信仰するならば、神様は其の十字架の功德に免じて、私共の罪愆を赦し給ふ。昔の人も、「心から心の鬼が身を責める」と言うて居る如く、人は本心にとがむる事のある間は、決して安心も満足もあつたものではない。それ故昔から自分の罪愆に氣の付いた人々

は、どうかして其の罪滅をしたいといふので、難行苦行をする者あり、慈善喜捨を行ふ者あり、堂宮を建立するものあり、犠牲を獻げてそれに免じて罪の赦を願ふ者もあつて、色々と苦心したものである。さり乍らこゝに唯一つ、天の眞の神様が、人間の罪愆を赦す爲にち立てになつた方法があつて、それは救主耶穌を信仰し、其の十字架の血潮の功德に頼ることである。「凡ての人罪を犯したれば、神の榮光を受くるに足らず。功なくして神の恩恵により、基督耶穌にある贖罪によりて義とせらるゝなり。」とあるのは其の事である。私共は耶穌基督に由りて、過去の凡ての罪を赦して戴かねばならぬ。

第二、救主耶穌は又、現在、私共の罪に穢れたる心を潔め、新しき心を有つた人間とならせ給ふ。人が眞實を以て耶穌基督に縋る時、基督は私共の靈魂を入れかへ、以來これまでと異うて、悪い事を心から嫌ひ、善いことを眞實に好く人間とならせ給ふ。「人若し基督に在らば新に造られたる者なり、古きは既に過去り、

視よ、新しくなりたり。」又「我いふ、御靈によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。」などとあるのは、基督に救はれて、現在此の世ながらに、一切の罪と縁を切つた世渡をなす可き事を教へたものである。譬へば同じ一升徳利でも、酒を入れてある間は酒徳利だが、酒をこぼして後を洗ひ、醬油をつめれば醬油徳利となる如く、同じ五尺の體を有つた人間も、悪しき心を有つて居る間は憐れな一箇の罪人であれど、一旦耶穌基督に救はれて、新しき心を有つた人間となれば、昨日迄の罪人は一變して、今日は神様の僕とならうといふものである。此の如く基督の救は人を現在の罪より救ひ、これを生れ更りたる善人とならしむるのである。

第三、救主耶穌は又、私共が此の世の旅路を終へたる後、滅亡に陥ることなくして天國に入り、限なく神様の御恵の中に生き存へらるゝ様、未來の救を授け給ふ御方である。其の事に就き、耶穌は或時「誠にまことに汝等に告ぐ、我が言を聞きて我を遣し、者を信する人は、永遠の生命を有ち、且審判に至らず、死より

生命に遷れるなり。」と、仰せられた。此の如き基督の救は、私共を未來永遠の滅亡より救ひ出す所の救である。

ジョン・ニュートンといふ宗敎家が年寄つて後、兎角物忘をする様になつた時の物語に、「それでも、こゝに二つだけ、どうしても忘れられぬことがあつて、それは私が大罪人であつたこと、また耶穌基督が私を救ひ給うた事と、それ丈である」といはれた。此の如く人は皆神様の前に罪人だといふ事と、耶穌基督が其の罪人を救はん爲に世に來り給うたといふ事と、此の二つは、何時迄も變ることなき、基督教に最も大切なる奥義である。

第三章 誕生

参考【ルカ傳二章一節至三十八節、マタイ傳二章】

「こゝに居るほどにマリヤ月満ちて初子を生み、それを布に包みて馬槽に臥させたり。」(ルカ二・六、七)

羅馬の皇帝カイザル・アウグストといふ方から、戸籍調査の嚴命が出で、寄留地に在る者は、皆一先づ原籍地に歸つて、登録の手續をせねばならぬこととなつたので、當時ガリラヤのナザレ村に住んで居つたヨセフは、其の臨月に近い聘定の妻マリヤを携へ、南へ凡そ三十二三里を距つる、エダヤのベツレヘム村を指して旅立することとなつた。既に到着して見ると、時節柄何れの旅舎も悉くお客が一杯いで、泊るべき室がない故、止むなく或る宿屋の庭の隅にある厩を取片付け、そこに一夜を明すうち、妊婦は忽ち産氣附き、嚙て玉の如き男子をうみ落したが、

他に方法もないので、取敢ず嬰兒を布にて包み、之を馬槽の中に臥さしめた。此の如きものが即ち神様の御獨子、世の救主なる耶穌基督が、人となつて此の世に現れ給うた時の御有様であつた。さても痛はしい事と謂はねばならぬ。

第一、世界人類の歴史に何より大切な事件である、耶穌基督の御降誕は、斯して寂しく、靜に、一向世間の人の注意をも惹かずに行はれた。たゞ其の夜ベツレヘムの村外れに、羊の群を番する數人の牧者があり、不思議なる天の使の御告に由り、救主の御誕生になつた事を知り、打連れて其の宿屋を訪ね、むさくるしい馬槽の中に、布にてつゝまれた嬰兒を見出し、神様を讃めて歸つたといふのである。此の如く世の人が誰一人まだ神様の御子の出現を心付かない時、一番先に尋ねて來て之を拜んだ者は、無學にして正直なる牧者であつたといふのは、面白いことである。一體宗教といふものは、唯頭でばかり考ふべき道理ではなくて、反つて心で味ふべき事實である。それ故假令無學でも、愚鈍でも、正直な心を以て神様

を信仰する者は、他の理窟には明るくとも不正直な學者物識よりは、反つて道に進むことが早いものである。乃ち救主耶穌が後日の御祈禱の中にも「天地の主なる父よ、我感謝す、此等の事を智者慧き者に隠して、嬰兒に顯し給へり。父よ、然り、斯の如きは御意に適へるなり」とある如く、神様は何時の代にも、質朴にして熱心なる平民貧民を導き、これに案外深き信仰の奥義を示し、其の御榮の爲に用ゐ給ふ如き例が多い。或る大學教授が至つて無學な救世軍の一兵士に對ひ、「お前は基督が、何といふ國で生れた方だか、知つて居るか」と問はれると。「知りません」と答へた。「それでは基督を生んだ母の名は。」「知りません。」「基督はどういふ一生を送られたか。」「知りません。」「基督は幾歳で、此の世を去られたか。」「知りません。」「基督はどうして、非業の最後を遂げられたか。」「よく存じません。」「それではお前は、一體基督のことに就いて、何を知つて居るのか」と問ふと。答へて「一向何も存じませんけれ共、唯基督様、基督様というて、お籠り申

したお蔭で、以前は仕方のない無頼漢であつた私が、今では御覽の通、堅氣な人間になることが出来ました」と、いうたさうである。それ故どんな無智無學の人でも、失望することは無い。神様は學者や物識のみ、最良するお方ではなくて、反つて特に大多數の貧民平民に目をかけて、之を憐み給ふものである。

第二、ヨセフとマリヤとは、嬰兒が生れて四十日目に、當時の風習に従ひ、嬰兒を抱いて其の國の首都エルサレムに上り、神殿に參詣して獻物をなし、嬰兒の爲に獻兒式を執行した。處が其の場に居合せたシメオンといふ老翁と、又アンナといふ老媪とは、その嬰兒が行末世の救主となるべきお方であることを曉り、喜んで之を祝ひ、また神様の深き御恵を感謝した。此の二人の者は、其の時代の眞面目な宗教家の、代表者とも見るべき人達であつた。其の他にも當時ユダヤの國には、幾百千人の宗教に身を委ぬる人はあつたが、多くは所謂「坊主の不信心」で、宗教を唯糊口の種となし、儀式や禮典の末にのみ拘泥して、眞に神様の思召を行

ひ、世の人の爲に盡す精神を有つた人は、至つて稀であつた。併しながらシメオンと、アンナ女とは、眞實なる宗教家であつた。それ故神様の特別なる御指導により、逸早く嬰兒なる耶蘇を拜むことが出来たものと見える。身を宗教に委ぬる人々は、信仰のことに狎れて、型に入つた様な宗教家となることなく、いつも新鮮快活なる靈の生命を胸の中に蓄へ、斷えず神様の御聲に耳を傾け、其の大御心を行うて居る様でありたい。

第三、エルサレムから一應ベツレヘムに歸つた處へ、今度は三人の東方の博士が訪ねて來た。此の人達は我が朝の昔、安部晴明などがやつて居つた様に、天文をくつて人間の事を占ふ學者であつたが、耶蘇が御誕生の砌、西方の空に不思議な星が現れたのを見、これ畢竟「ユダヤ人の王」となるべき、豪い御方がお生れになつた徴候に相違ないと、數百里外の遠國から、星を目當に尋ねて來たのであつた。此の博士等は、其の當時エルサレムの邊に住んだ多數の學者の様に、唯理

窟ばかり心得て居つたのでなく、反つて篤く神様を信じ、懇ろに道を求むる敬虔なる人達であつた。ユダヤ人の王として生れ給へるお方を拜み度ばかりに、長途の旅路を厭はず、多分の物入を惜まず、さて愈嬰兒なる耶蘇が、其の母マリヤの膝の上に在すお姿を見ては、寶の篋を開いて黄金、乳香、沒藥など取出し、之を其の前に獻げ、禮拜して歸り去つたといふのである。學者となるなら、何卒此うした、神様を敬ふ眞實の學者になつて欲しいものである。

第四、處が其の當時羅馬皇帝より任命せられ、ユダヤ全國を支配して居つたヘロデといふ王様は、無慈悲と残酷とで知られた人であつた故、前に東方の博士がエルサレムに立寄り、ユダヤ人の王として生れ給へる嬰兒の御誕生地を聞合せ、それがベツレヘムだと判つて、其の地に出かけた事を知るものから、然うした嬰兒を生かして置いては氣がかりであると、人を遣してベツレヘム村に居る二歳以下の男の兒を皆殺させた。斯すれば東方の博士が言うた其の嬰兒も、屹度其の中に

死んで居るだらうと、想像したからである。どういふ無法な事をしたものであらう。併しながら神様は豫めヘロデ王の斯る悪計を知り給ふ故、ヨセフに命じて其の妻のマリヤと嬰兒とを携へ、前以て遠く埃及の國に避難させてお在になつたので、危く毒手を免れることが出来た。斯てヨセフはヘロデ王の世を去る頃迄埃及に留り、後其の地を立出でてユダヤに歸り、再びガリラヤのナザレ村に行き、そこに住居を定むることとなつた。これは舊約聖書にある、埃及のパロ王がイスラエル人民を苦しめんとて、其の産れ来るほどの男の兒を皆殺させて居つた處、案外にも、我が娘が河のほとりで偶然拾ひ上げたイスラエル人の赤坊が、後大豪傑モーセとなり、埃及國民に反抗して、イスラエル人民を救ひ出すに至つたのと、似た様な話である。人は到底神様の御攝理に逆らうことが出来ない。『汝判ある策を蹴るは難し。』天に向うて唾する者は、其の顔に穢れを受け、道理であれば、私共は天畏ろしいといふ事を知つて、平生聊かたりとも、神様の御意に適はぬ事は之を

行はない様、其の心がけが何より大切である。

第四章 幼年時代

参考〔ルカ傳二章三十九節至五十二節〕

「耶蘇智慧も身のたけも彌増り、神と人とに益々愛せられ給ふ」(ルカ二・五二) 不經福音書といふものがあつて、聖書にない耶蘇基督の御物語を多く載せてある。其の中には、幼き耶蘇が泥で造つた鳥に命を吹き込み、本統の鳥として飛ばせ給うたとか、又は其の友達を山羊の子に變らせ給うたとかいふ様な、奇怪な話を傳へて居る。併しながら、新約聖書に録してある正史實傳の耶蘇は、極めて自然なる順序を逐うて、全くの「人の子」として、御成人なされたもの、様に見える。もとより其の時代の事に就いて、聖書に餘り精しい記録はなけれど、それでも私共が、そここの記事から想像し得べき數箇條の事實がある故、今それを左に、雜と申述へ度と思ふ。

先づ第一に注意すべきは、幼き耶蘇が、信仰篤く徳高き母の養育を受けられた事である。マリヤの連合であつたヨセフは、これも中々立派な人柄の男子であつたに相違ない。併しながら其の妻マリヤに至つては、流石に世の救主を産む名譽を戴いただけに、世にも稀なる徳行の婦人であつた。マリヤは其の初天の使から耶蘇を産み奉るべき神様の御旨を伺うた時、答へて「視よ、我は是れ主の婢女なり。汝の言の如く我に成れかし」と申した。此の「我は是れ主の婢女なり」といふ覺悟は、マリヤの一生涯を貫いた、高尚なる精神であつた様に見える。マリヤは身も靈魂も一切神様に獻げ、唯其の思召を行はん爲に世に生存へたのである。随つて其の幼き耶蘇を育てる上にも、絶間なき祈禱と行届きたる注意とを以て、之に當つて居つたのは言ふ迄もない。此は幼き耶蘇の場合だけでなく、昔から大に神様に用ゐられた人物の中には、幼い時代に善き母の養育を受けたる者が多い。ジヨン・ウエスレーと、其の弟チャールス・ウエスレーとの母なるスザンナは、

家庭教育に力を盡した婦人である。或時其の夫が妻の子供を教へる上に、根氣の好いのを不思議がると。答へて、「それでも二十遍教へれば憶える筈の學課を、十九遍で止めたら、惜しいではありませんか」と言うたさうである。此のジョンと、チャールズと、二人のウエスレーが、後にメソヂスト教會の先祖となり、當時腐敗し切つた英國の精神界を一新し、引いては世界の各國に迄、大なる感化を及ぼしたのである。大將ウイリアム・ブリスの母は、亦慈悲深く忍耐強き、行届いたる婦人であつた。即ち大將の言に「神様が此の世にて、人間に賜はる最大の賜物は、恐らく神々しき母であらう。神々しき母は其の子の未來を造るものにて、之に善良なる思想傾向を與へ、將來非常な大變化のあらざる限り、其の子が此の世にて幸福なる生涯を送り、來世にては亦永遠の生命を得べき土臺を据る。しかも私は實に、然うした善き母を授かつて居たのである」というてある。諺に「搖籃を動かす手は、世界を動かす」といふこともあれば、人の母たるものは、其の子に對する責任の大なることを知り、之を十分満足に果さんことを心がけねばならぬ。

第二、幼き耶穌は其の身體上、至極健全なる發育を遂げられたものと見える。彼が後日、寢食を忘れて、傳道及び慈善の爲に劇烈なる運動をせられた時の如きも、別に甚しく身體に障らなかつた事を見れば、平生どんなに健康が優れてお在なされたかを察する事が出来る。私共は又身體の健康を重んぜねばならぬ。我が肉體は即ち神様の御靈を宿すべき宮であることを知つて、出来るだけ大切に之を扱はねばならぬ。

第三、幼き耶穌は又、随分と學問の道を勵まれた様である。もとより耶穌はナザレの片田舎にて、殊に大工を生業とする、貧しきヨセフの家に人となり給うたので、所謂學校教育の便宜は甚だ少かつたが、それにも拘らず、耶穌は事情の許す限り、其の智慧力量を磨く爲に力を盡し給うたこと、疑がない。或は言ふ、耶

蘇はヘブル語と、ギリシヤ語と、アラミック語と、都合三つの國語を御存知であつたらしいと。果して然うであつたとすれば、唯それだけでも、耶蘇が平生、どんなに學問の道を勵み給うたか、想像されるではないか。

第四、幼き耶蘇が、又どんなに聖書の研究に心をこめ給うたかは、其の十二歳の折、兩親に連れられて、エルサレムの市に上られた時、神の宮に行つて、そこに居る教師達から種々信仰の話を聞き、又聖書の事を問ひなどして、歸ることを忘れられたといふ御物語に由つても、明かに知られる。ヨセフとマリヤとは、多分耶蘇が道連の中に居らるゝものと思ひ、都を立出でて家路に上りたる後、不圖氣が付て、親戚知人に聞合せたけれども見出さず。驚いて今一度エルサレムに引返し、そこそこと探しあぐんだ後、終に宮にて幼き耶蘇が、多くの教師と問答して居られるのを發見した。そこでマリヤは、「見よ、何故かゝる事を我等にせしぞ、視よ、汝の父と我と憂ひて尋ねたり」といふと。耶蘇は答へて「何故我を尋ねたる

か、我は我が父の家に居るべきを知らぬ乎」と、言はれたとある。これに由つて見れば、幼き耶蘇は唯、聖書を熱心に研究して居られたばかりでなく、其の頃から早くも既に、天の父なる神様を崇めて之に事ふべきことを、覺悟して居られたのが想像される。さても勿體ない御心がけではないか。

第五、今一つ、幼き耶蘇に就いて是非注意して置き度のは、其の兩親に孝行であられたことである。それに就いて聖書には、「耶蘇彼等と共に下り、ナザレに往きて、順ひ事へ給ふ」と書いてある。即ち耶蘇は孝行なる子として、飽く迄其の兩親に順うてお在なされたのである。基督教と親孝行と、どういふ關係があるか知り度と思ふ人は、耶蘇が其の兩親に孝行でお在なされた事實を、深く考へねばならぬ。後に耶蘇が神様から遣された救主として、天國の福音を世に傳へ給ふ時にも、其の御教の大意は、神様を親とし、人類を兄弟とし、末終に全世界を擧げて、之を神様といふ父上の御支配なさる、愛の一大家庭にし様といふ他はなか

つたのである。而して此の如きは、決して親兄弟を粗末にし、又は家族に對する務を輕んずる人の口から、宣傳へらるべき福音でない。反つて其の反對に、飽く迄も、温かい家庭の情愛を深く味うた人物に由つてのみ、唱へ出でらるべき教であるのは、直に合點さるべき事柄である。

或時七歳になる印度人の子供が、耶蘇の幼い時の御物語を聞いて後、祈つて言ふには、「神様よ、どうか私を、耶蘇様が七歳で在なされた時の様な、善い兒にして下さいませ」とのことであつた。私共は亦何卒、此うした心がけの子供を、多く育て上げたいものである。

第五章 田舎大工

参考【マルコ傳第六章一節至六節】

「彼は木匠にして云々。」(マル六・三)

「子に職業を教へざるは、之に盜賊を教ふる也」と。昔のユダヤ人は、此ういふ思想にて、其の男の子が十二歳になるのを待ち、生活に困らぬ人でも皆これに、何等かの職業を教へる風があつた。況してナザレ村のヨセフは、自分が貧しい一箇の大工である上に、子供の數は増すやら、自分は追々年が寄るやら、其の日其の日の煙を立てることさへ容易でないゆゑ、一番年長の男子なる耶蘇に同じ大工の職業を教へ、早く家計の助をなさしむるに至つたのは、一向不思議もないことである。

とはいへ、耶蘇は尋常の人でない。これは神様の御獨子が世の罪人を救はん爲

に、暫く人間の姿をとつて現れ給うたものである。それさへ勿體ないことの至であるに、今は自分から亦一箇の田舎大工として、木をさり板をけづりつゝ、額に汗して働き給うたといふのは、どういふ恐れ多い事であらう。

私共は斯く大工の仕事着をきて、ヨセフの工場に働き給うたナザレ村の耶蘇を胸の中に思ひ浮べ、身に引當て、學ぶべき教訓が多々ある様に覺える。

第一、田舎大工としての耶蘇は、労働の神聖なることを教へ給うたのである。世には労働することを恥ぢ且厭ひ、反つて何の爲すこともなく日を過すのを、上品な生活の様に心得る愚者がある。併しながら労働することは人間の務である。労働は人が神様から授かりたる本分を盡す方法にて、また生きて甲斐ある世渡をする手段である。人の健康は、労働せずには之を保つことが困難にて、人の智慧力量は亦、労働なしには之を養ふことが六づかしい。又此の世で獨立自營の生活を營まうとするには、どうしても骨惜みなく労働することが必要である。昔から

居候をうたうた川柳に、滑稽なのが多くあり、「居候三ばい目には竊と出し。」「居候お茶が熱いと飯でうめ。」又「居候出さば出る氣で四はい食ひ」などとあるのは、何れも皆自分で労働することを厭ひ、他人の勞力に由つて飯を食うとする者の、意氣地のない有様を穿つたものである。或る學者の説に、此の世に三種の人物があつて、第一は先方で承知しないのに、強ひて他人の勞力に由つて飯をくふもので、これは即ち泥棒である。第二は先方で承知した上、他人の勞力に由つて飯をくふもので、これは即ち乞食である。第三は自分の勞力に由つて、自分の糊口をするもので、唯これ丈が人間の數に入るべき、眞の人間であるといふことであつた。人は又労働せずには、高尚なる精神を養ひ、崇高なる品性を造り上げるが出来ない。「小人閑居して不善をなす」とか、又は「何もなす事なくして惡事をなす」とかいうてあるのは、労働を厭ふ者が、いつの間にか罪惡に墮ちて行く有様をいうたものである。さり乍ら神様を敬うて一生懸命に稼ぐことは、身心共に壯

健にして、不羈獨立なる生活を營む所以の方法である。亦堅實にして信頼すべき品性を養ふ所の手段である。古人も「勞働は即ち祈禱である」というて居る通、根氣好く、辛抱強く、正直の額に汗して己が本分を盡すことは、其の儘に最も高尚なる神信心の道である。而して田舎大工として働き給うたナザレの耶穌は、此の最も大切なる教訓を、誰にも解る様に、其の身を以て教へ給うたものである。

第二、次に田舎大工としての耶穌は、清貧の尊むべきことを示し給うたのである。貧乏は兎角不自由勝である。金錢は此の世で最も大なる力の一つに相違ない。併しながら私共は別に金錢よりも貴いものゝある事を知り、又貧乏な中にも高尚にして有益なる世渡の、出来る道理を辨へねばならぬ。同じ貧乏といふ中にも、自分の懶惰や又は濫費から勝手に招く貧乏がある。此等は一尙威服出来ないのは、改めて申すまでもない。併しながらこゝに又神様を敬ひ、忠實に我が本分を盡しならがの貧乏といふものがある。而して昔から、最も多く世のため人のために盡

した人達は、大概皆然ういふ意味の貧乏、即ち所謂清貧の中に、其の世渡を續けたものである。孔子も、釋迦も、共に度々空腹い目をせられたことがあり、有名なる宗教改革者ルーテルの如きも、死後に何一つ遺産がなかつたが、それでも能く其の貴き人格と事業とを留めて、長く天下後世に功德を及ぼしたのである。それ故貧乏でありながらも清き生活を營み、又は有益なる生涯を送らるゝことは、今更疑ふべき餘地がない。私共はどんなに貧乏しても、其の間に清き生活を營まねばならぬ。耶穌は世の人が唯物質上の富にあてがれ、金さへあれば事足る様に考へて居る真中に現れ、反つて清貧の中に神様を崇め、其の御意を行ふことが、どんなに貴いものかといふ道理を、身を以て教へ給うたのである。聖書に「汝等は我等の主耶穌基督の恩恵を知る。即ち富める者にて在したれど、汝等の爲に貧しき者となり給へり。これ汝等が彼の貧窮に由りて富める者とならん爲也。」とあるのは、眞に意味の深い御言である。

第三、田舎大工としての耶蘇は、又、私共が、其の境遇に超越した、世渡をなすべきことを、教へ給うたのである。耶蘇が田舎大工として働き給うた土地は、「ナザレより何の善き者出でんや」と言はれた程、風儀の良くない町であつた。耶蘇は然ういふ風儀の亂れた、人氣の悪い町の、しかも下等社會に混じて生活しながら、それでも能く其の神々しき品性を保ち、亦能く神様の御意を其の身に行うて居られた。其の通、私共も亦、罪に穢れた世に身を置きながら、周圍の良くない風俗に感化せられず、どこ迄も神々しき世渡を續ける様でなくてはならぬ。否々唯それだけではない。私共は罪の世に身を置きながら、其の罪の世を改革する爲に生存すべきものである。それ故耶蘇は後に其の弟子達を戒めて、汝等は此の世の腐敗を止むべき鹽である、又罪惡の暗黒を照らすべき光であるぞと教へ、其の爲に天の父なる神様に祈禱して、又「我が願ふは、彼等を世より取り給はんことならず、惡より免らせ給はんこと也。」と、仰せられた。奥野昌綱氏の歌に「鹽

となり光ともなる此の世より、とりたまへとは我も祈らず」とあるのは、此の意味をうたうたものである。私共は基督を信ずる信仰によりて、亦此の世の悪しき風俗に打勝ち、周圍の境遇事情に不似合な程、純潔高尚なる生活を営むものとならねばならぬ。

第六章 野に呼べる人

参考(マタイ傳三章)

『荒野に呼はる者の聲す、主の道を備へ、その路すぢを直くせよ。』(ルカ三・四)
 救主耶穌が世に出て公けの活動に取かゝり給ふ數ヶ月前のことである。ザカリヤの子ヨハネといふ者が、神様の特別な御命令を受け、ユダヤの荒野にて大傳道を開始した。此のヨハネは身に駱駝の毛織衣を着、腰に革の帶をしめ、蝗と野蜜とを常食としたといへば、どんなに質朴簡易なる生活を營んで居つたか、想像せられる。ヨハネの一生の事業は、間もなく世に出でらるべき救主耶穌の前觸をなし、これを世の人に紹介することであつた。其の熱烈なる精神と、大膽なる警告とは、一時全國民の心を動かし、何千何萬といふ程多數の人々は、競うて其の許に集つた。ヨハネは世の人が犯せる罪を悔改めて、新しき生活に入るべきことを

告げ、其の教に従うて新しき世渡の門出をしたいといふ者は、之を裸にしてヨルダン河の流に入らしめ、これに悔改のバプテスマを行うてやつたのである。
 ヨハネの説教の大主意は、悔改といふことであつた。『汝等悔改めよ、天國は近づきたり。』『蝮の裔よ、誰が汝等に來らんとする御怒を避くべきことを、示したるぞ。然らば悔改に相應しき果を結べ』と。ヨハネは世の人が罪を悔改めて、耶穌基督の御救を待望すべきことを警告したのである。此の罪を悔改めるといふことは、今も昔も變ることなき大切なる眞理である。神様は悔改といふことを、人間の美德と見做し給ふ。人は皆神様の前に罪を犯して居る。此の世に誰一人、神様の前に罪のない人間といふはない。それ故私共の爲すべきことは、せめて其の惡かつたと心付いた行を速に悔改め、其の御赦を求めることである。いづどや日糖事件と名づくる疑獄が起り、多數の代議士が一時に入牢した時、或人が刑務所を訪ねて、一人の代議士に見舞を言ふと、其の返事に『何、君、これは雷

が落ちた様なものだ。誰の頭の上に落ちる筈とも定らぬのが、運悪く僕等の上に落ちたのだ。』といふことであつた。其の次の代議士をたづねて、同じく見舞の辭を述べると、『何、世間には僕等よりひどい事をして居る奴が、幾らも居る。決して僕等ばかりではないよ』といふ挨拶であつた。更に今一人の代議士をたづねると。其の人は愁然として頭を垂れ、『どうも此度の事に就いては、何とも申譯がない。何れ此のお詫は社會に出て後、事實で申上げるつもりである。』というたきり、其の上何にも言はなかつた。此の人は、後放免になつて刑務所を出ると、直に救世軍本營をたづねて、信仰上の忠告を求め、間もなく其の忠實なる軍人となられたのである。古語に『寧ろ玉となつて碎くるも、瓦となつて全きを恥づる』と、いふことがある。私共はどうせ神様の前に罪のある身ゆゑ、下手に申譯を作つたり、推諉をしたりしないで、寧ろ正直有體に一切の罪愆を悔改め、其の御赦を求めに如くはない。聖書に、『若し罪なしと言はば、是自ら欺けるにて眞理我

等の中になし。若し己の罪をいひあらはさば、神は眞實にして正しければ我等の罪を赦し、凡ての不義より我等を潔め給はん』とも、亦『其の罪を隠す者は榮ゆることなし、されどいひあらはして之を離るる者は、憐憫を受けん』とも、教へてある。罪人が神様の前に爲すべき第一の事は、悔改である。次にヨハネは、程なく、世に出で給ふべき救主耶穌を紹介して、『我は汝等の悔改の爲に水にてバプテスマを施す。されど我より後に來る者は我よりも能力あり、我は其の鞋を提るにも足らず。彼は聖靈と火にて汝等にバプテスマを施さん』と申した。即ちヨハネは耶穌基督の前に出ては、其の鞋をとる價値もなきものにて、又其の行ふバプテスマは、唯人を水の流に浸める表面の儀式に過ぎないけれ共、耶穌基督は神様の御靈に由つて、人の靈魂にバプテスマを施す御方である。ヨハネのは唯水を以て人の身體の上に行ふバプテスマであれど、耶穌基督のは御靈の火を以て、人の靈魂の上に行ひ給ふバプテスマである故、何れも進んで

其の基督を信仰せよとの意である。然らば人の靈魂の上に行はるゝ火のバプテスマとは、どんなものかといふに、第一、火は燬き盡すものである。其の如く耶蘇は人の心にある凡ての穢を皆燬き盡し、其の罪愆との腐縁を奇麗に絶ち切り給ふ御方である。第二、火は熔解けるものである。其の如く耶蘇は私共の胸の中より一切の混淆物を取除き、純粹無垢の人間となつて、一心に神様の思召を行ふ者とならせ給ふ。第三、火は煖むるものである。其の如く耶蘇基督は熱くもなく冷くもなき、微温い人の心を煖め、熱心を以て世の救の爲に戦ふ者とならせ給ふ。使徒パウロが「基督我等の爲に己を與へ給へり。是れ我等を諸般の不法より贖ひ出して、善き業に熱心なる特選の民を、己が爲に潔めんとてなり」というたのは、その事である。

多くの人々がヨハネの許に集つて其の教に耳を傾けて居る最中、耶蘇基督も亦ナザレを出立してユダヤの荒野に來り、ヨハネにバプテスマを受けさせよと仰せられた。ヨハネは吃驚して「我は汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給ふか」というて辭退すると。耶蘇は答へて「今は許せ、われら斯く凡ての正しき事を悉く遂ぐるは當然なり」といひ、強ひてバプテスマをお受になつた。折しも天忽ち開け、聖靈は鳩の如き形にて耶蘇の頭の上に現れ、且天より聲ありて「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」と聞えたのである。

元來ヨハネのバプテスマは、唯罪を悔改めた表號のバプテスマである故、罪なき神様の御子耶蘇が、之をお受になるといふのは、變な話の様であるが、これには深き仔細のあることにて、即ち第一、耶蘇は斯してヨハネの悔改の教が、どんなに大切なものかといふことに其の裏書をなし、第二、御自分の今後の事業が、ヨハネに由つて開始せられた運動の繼續であることを示し、第三、又これを機會に、愈よ其の公の運動に取りかゝるべき發表をなされたのである。此の時耶蘇の御年齢は三十歳であつた。後になつて、ヨハネの弟子の中から、來つて耶蘇に従ふ

者も少からず、世間の人々も多く耶蘇の許に集つて、ヨハネの方に來る者の數が漸く減つた時、其の事を苦にしてかれこれ小言をいふものがあると、ヨハネは戒めて、「自分は救主耶蘇と、此の世の人との間に立ち、新郎と新婦との仲介役を勤むるものである。仲介役に取つて何よりの満足は、唯新郎と新婦との仲睦さ有様を見ることである。其の如く自分に取つては世の人が、救主耶蘇に隨喜する有様を見るほど嬉しいことはない。彼は日々に盛んになり、我は日々に衰へる、これが自分の本懐であるぞ」というたのである。どういふ高貴なる我を忘れた精神であつたらうか。歌に「基督を人に見せばやわれはその、うしろにだにもあらじとぞ思ふ」と。嗚呼これこそ眞によく、ヨハネの獻身義烈の精神を歌うたものではないか。

第七章 野の試煉

参考「マタイ傳四章一節至十一節」

「主は自ら試みられて苦しみ給ひたれば、試みらるゝ者を助け得るなり。」(ヨハネ二・一八)

ヨハネからバプテスマを受けて後、耶蘇は聖靈に導かれ、惡魔に試みられん爲に野に往き給うた。古語に「敵國外患なき時は國すなはち亡ぶ」とか、又は「憂患に生きて安樂に死する」などいうてある如く、餘り苦勞のない生活は、人をして神様を忘れしめるものである。又餘り氣樂な身の上は、人の精神元氣を頽敗せしめるものである。それ故神様は態と惡魔が私共を試みることを許し、私共が折火の如き苦難を凌ぐことに由つて、金の如くふさわげられた人間となることを喜び給ふ。所謂「主其の愛する者を懲しめ、凡てその受け給ふ子を鞭ち給ふ」とは、

此の事である。勿論耶穌基督は罪なき神様の御獨子である故、何も私共の様に試煉などお受けなさる筈はないやうだが、それでも既に人間の姿をとつて、此の世にお出になつた以上、亦萬事萬端、全く私共と同じ經驗をお積み下さる必要があつた。即ち耶穌は全く私共と同じ様な試煉を受けながら、美事に之に打勝ち給うたればこそ、後の試煉に惱む私共を救ひ給ふ便宜が多いわけである。乃ちへフル書に『主は自ら試みられて苦しみ給ひたれば、試みらるゝ者を助け得るなり。』又『我等の大祭司は、我等の弱を思ひ遣ること能はぬ者にあらず、罪を外にして凡ての事、我等と等しく試みられ給へり。此の故に我等は憐憫を受けんが爲、また機に合ふ助となる恵を得ん爲に、憚らずして恵の御座に来るべし』というてあるのは、如何にも意味の深い御教である。

然らば耶穌基督はどんな風に惡魔の試煉に打勝ち給うたか。熟々考へて見るに、耶穌が野にて受ひ給うた第一の試煉は、之を今時の語で言へば、生活問題の試煉で

あつた。即ち惡魔は耶穌が、四十日四十夜食はずして、饑ゑて居給ふ様子に目をとめ、そこらにあつた石塊を示し、『汝若し神の子ならば、命じて此等の石をパンとならしめよ』と言ふと。耶穌は直ちに舊約聖書の一句を引き、『人の生くるはパンのみに由るに非ず、神の口より出づる凡ての言に由る』と録されたり』というて、之を弾ねつけ給うた。此の如く惡魔は今もパンの問題を以て、多くの人々を陥れて居る。『そんな堅苦しいことを言うて居ると、食へなくなるぞ。それよりも寧ろ汝の舌をパンとなし、筆をパンとなし、學問をパンとなし、力量をパンとなし、信仰も、主義も、良心も、一切の物をパンに化へて、兎も角も安樂に、其の日を過す工夫をしたが可いではないか』と、此ういふ風に、惡魔は今もパンの問題を以て私共を惑しに来る。併し乍ら私共は、此の世にパンよりも大事なものゝあることを知つて、神様の御意を畏まねばならぬ。私共は生活問題以上に、信仰問題を置かねばならぬ。『先づ神の國と神の義とを求めよ。さらば凡て此等の物は汝

等に加へらる可し』との、神様の御約束は、確實にして寸分も疑ふべき餘地がないのである。

第二の試煉は信仰上の試煉であつた。悪魔は耶穌が生活問題以上に信仰を重んぜられるのを見て、乃ちこれを宮の高い頂に連れて行き、それ程信仰々々といふなら、一つこゝから飛んだが可からう。『汝若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「汝の爲に御使達に命じ給はん、彼等手にて汝を支へ、その足を石にうち當つること勿らしめん」と、録されたり』と言ひ、聖書の句など引いて之を試みたのである。すると耶穌は重ねて舊約聖書の語を引き、『主なる汝の神を試む可からず』と、亦録されたり』というて、之を却け給うた。此の如く悪魔は今も、比較的熱心に神様に事へて居る其の僕等を誘ひ、之をして信仰を重んずるの餘に秩序を無視し、神様に縋るからというて己が本分を怠らしめる様にと、仕向ける。即ち高い宮の頂上から下に降りるには、一步一步足を運ぶべき筈であるに、それを

神様の御守護があるからというて、無闇に高い處から飛び降りる様な事を、教唆するのである。併しながら神様は秩序の神様である。私共は人事を盡して天命を俟たねばならぬ。又信仰の精神を行ふに、事務の手段を以てする心がけが大切である。然るを自分の盡すべき本分を怠りながら、唯漫然神様の御助をのみ祈るの、是即ち神様を試みるといふものである。氣をつけねばならぬことである。

第三の試煉は又事業上の試煉であつた。悪魔は最後に耶穌を高い山に連れて行き、世界の國々と其の榮華の状とを見せて、『汝若し平伏して我を拜せば、此等を皆汝に與へん』というたが、耶穌は今度も聖書の語を引いて、『サタンよ退け』主たる汝の神を拜し、唯これにのみ事ふべし』と録されたるなり』というて、美事に之を却け給うたのである。斯の如く悪魔は今も私共を事業上に於て試み、同じ神様の御業を行ふにしても、成るべく俗受の好いやう、又は困難の少いやうにと、所謂『虚言も方便』などいふ、如何はしき態度に出で、目的の爲には手段を擇まず、

寸を曲げて尺を直くするといふ如き、瞬眛な處置をさせやうとする。併し乍ら私共は如何なる場合にも、唯眞直に神様の御旨を行はねばならぬ。當に其の目的のみ言はず、其の手段方法の末に迄、悉く唯神様の御旨を實行する覺悟が肝要である。而して若し其の爲に必要ならば、私共は一生涯埋れ木となつて果ることも甘んじ、目前の成敗利鈍を顧みず、隠れたるに鑒給ふ神様の前に、眞實を盡すことを決心せねばならぬ。くれぐれも、成功を急ぐの餘り、惡魔にお辭儀をして其の援助を借りることのない様、其の注意が大切である。

耶蘇は斯して、三度が三度共、美事に惡魔の試煉を撃退し給うた。然らば私共はどうして亦耶蘇と同じ様に、平生惡魔の試煉を撃退し得べきかといふに、それについて、肝要なるは、第一、御靈の御導を求めることである。耶蘇は聖靈に導かれつゝ、惡魔の試煉に遭ひ給うた。ジェレミー・テラーが、「耶蘇は善靈に導かれて、惡靈に試みられ給うた」と言うたのは、その事である。

第二には聖書の語を胸に蓄へて居り、之を以て敵に嚮ふことが大事である。聖書は信仰上の劍である。「御靈の劍、即ち神の言」といふのは、其の事である。私共は耶蘇が三度共聖書の語を引いて、惡魔に答へ給うた如く、亦聖書の語を力とたのみ、之を以て惡魔の試煉を撃破せねばならぬ。

第三に大切なるは確乎不動の信仰である。惡魔は三度共「汝若し云々」というて耶蘇に近づいた。「若し」といふ語は惡魔の慣用語である。惡魔はいつも不確實曖昧なる、「若し」とか、又は「しかし乍ら」とかいふ様な語を以て、私共に近づくものである。それ故私共は其の都度、確乎不動の信仰を以て之と戦はねばならぬ。

第四に大切なるは果斷である。「斷じて行へば鬼神も避ける」習私共は耶蘇と共に「サタンよ、我が後に退け」というて、ひと思に惡魔の試煉を排除しねばならぬ。逡巡躊躇は敵に乗すべき機會を與へる様なものである。「若し右の目汝を

躓かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナ(地獄)に投げ入れられぬは益なり。若し右の手汝を躓かせば、切りて棄てよ、五體の一つ亡びて全身ゲヘナ(地獄)に往かぬは益なり」とは、これ私共が果斷を以て、罪と惡とに打勝つべきことを教ふるものではないか。

第八章 カナの結婚式

参考【ヨハネ傳二章一節至十一節】

「耶穌も弟子達と共に婚禮に招かれ給ふ。」(ヨハ二・二)

野の試煉が終りて後、耶穌が今一度ヨハネと御出會になつた時、ヨハネは其の弟子に對ひ、「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。われ曾て「わが後に來る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云ひしは、此の人なり」といふて、之を紹介した。「神の羔羊」というたわけは、此の國では昔から羔羊を殺して犠牲とし、それを神様に差上げて罪の赦を祈る風習があつたので、耶穌が丁度其の羔羊と同じ様に、身を犠牲として世界人類の罪を贖ふ御方だといふことを、教へたのである。そんなことからヨハネの弟子の中に、耶穌に従うて其の弟子となるものも、數人あつた。

三四日の後、耶蘇は新に得たる四五人の弟子と共に、招かれてガリラヤのカナといふ所の、何人かの結婚式に列り給うた。カナはナザレから東北へ二里程の處である。此の結婚式には、耶蘇の母マリヤも立會れたのであるが、式の半に饗應に用ゆる葡萄酒が罄した。葡萄酒とはいへど、これは葡萄の汁を美味しく製した迄のもので、酔うて前後を忘れる程の飲料ではなかつたさうである。耶蘇の母マリヤは此の有様を見て心配し、耶蘇に對ひ「彼等に葡萄酒なし」というて相談を持ちかけ、一方ではそこに居る僕共にむかひ「何にても其の命ずる如くせよ」と申附けられた。ユダヤ人の風として食事の前や、又は外から歸つた時など、一々手を洗ふ習慣があり、自然どこの家にも、大概幾つかの水甕を備付けてあつたが、耶蘇は此の時その家に、四五斗入りの石甕が六つ程もあるのに目をとめ、僕共に命じて一つ残らず水を其の石甕に抱ませ、然る後復それをくみ取つて御馳走の席に運ばせられたが、こは不思議、たつた今くみ込んだばかりの水が、いつの間に

か立派な葡萄酒に化つて居つた。しかもそれが如何にも上等の葡萄酒になつて居たので、會主は之を訝り、竊と花郎の袖を引いて、「誰でも此んな場合には、始の間に佳酒を出し、後には悪酒を出すのに、君はどうして此んな風に、最後迄佳酒をしまつて置いたのか」と問うた位であつた。これは耶蘇が行はれた最初の奇跡にて、之を見た弟子達は、何れも皆大に其の信仰を篤くしたといふことである。今此の物語に就いて私共の學ぶべき教訓は、先づ第一に家庭制度の神聖なることである。中には家を出で、世を棄て、山に入る様なことを、特別に高尚な生活の如く教へる宗教もあれど、耶蘇は之に反して、夫婦、親子、兄弟等の關係を、極めて大事なものと見做し給うた。或人の言に「釋迦は妻子をふり棄て、宗教の生活をはじめ、耶蘇は結婚式を門出として公けの事業に取りかゝり給うた」といふてある。此の如く耶蘇の宗教は家庭を重んずるものである。私共は神様の御意が銘々の家庭に行はれる様、心がけねばならぬ。大將ウイリアム・ブリスの言に、

「凡ての家庭は神様の宿り給ふ所でなくてはならぬ。エデンの園の一番最初の家庭が幸福であつたわけは、其の場所や、氣候や、美しい花や、甘い果實や、其の他種々目と耳とを喜ばすものがあつたからでなく、唯神様がそこに在し、そこに往來して人と交り、人と言語をかはし給うたからである。また私共が目ざして行く天國も、神様がそこに在し給ふ故に幸福なのである。それ故私共は、此の世からして其の家庭を、神様の宿り給ふ所とせねばならぬ。即ち救世軍の會館と同じく、其の家庭を全く、確實に、神様の御用の爲に獻げた場所となし、そこに神様を愛し、之を禮拜すべく、神様は亦そこに現れ、其の御靈をそぎ、其の子等と交通し給ふ様でなくてはならぬ」と教へてある。私共は此うした神々しき、神様の御旨の行はるゝ家庭をつくらんことを、心がけねばならぬ。

第二、それと同時に、家庭の根原は夫婦にある。それ故私共は男女間の貞節を重んじ、どこ迄も夫婦の關係を神聖なものとして、取扱はねばならぬ。自然、

カナの結婚式の時と同じ様に、諸君の結婚式には、是非共救主耶蘇がお立會下さる様でなくてはならぬ。私共は結婚問題の上に神様の御導を求め、只管其の思召に従はねばならぬ。

第三、マリヤは僕共にむかひ「何にても其の命ずる如くせよ」と言付けられた。即ち耶蘇が御命令になる通を、何でも素直に行へといふことである。而してこれは亦今日の私共銘々に、至極適當した忠告ではあるまいか。私共は平生何でも耶蘇が命じ給ふ通に實行すべきものである。耶蘇は聖書の中に、私共が片時も忘れてならぬ貴き御教訓をのこし給うた。私共はそれ等を心にとめて、其の御命令の儘を行はねばならぬ。又耶蘇は聖靈を私共の胸の中に遣り、其の折々に辨へねばならぬ御意を顯し給ふ。それ故私共は、眞直に唯救主の御旨に従ふべきものである。

第四、耶蘇は水を葡萄酒に化へる力を有ちながら、それでも水をくむこととは、

之を其の僕共に命じ給うた。此の如く私共が自分に出来る限の事をなす時、神様は神様でなくては出来ない事を行ひ給ふ。それ故「神様よ、私を罪より救ひ給へ」と祈る者は、それと同時に、自分から一切の罪に遠ざからねばならぬ。又「神様よ、人を基督に導かせ給へ」と祈る者は、自分から其の人を集會に誘ひ、或は之に信仰上の勸をせねばならぬ。或時一人の少女が臥床に入る前に祈禱をして、「神様よ、どうか兄さんの係蹄に小禽が懸りませぬやう、屹度懸らぬとは思ひますけれ共、どうか助け給へ」と、いふゆるゑ、其の母は不思議に思ひ、「小禽が係蹄に懸りませぬやうといふのは解つたが、屹度懸らぬと思ひますけれ共といふのは、どういふわけか」と尋ねると、少女は答へて、「だつても母さん、私は先刻往つて、兄さんの係蹄を壊して來たんですものを」と、いうたさうである。其の如く私共は亦何事にも、自分に出来るだけの務を盡し、其の以上の處は神様に願ふ様でなくてはならぬ。私共は言語で神様に祈るのみならず、其の手の工を以て神様に願ひ求めることが肝要である。

第五、其の日の會主は、宴會の終に佳酒が出たのを怪み、「誰でもこんな場合には、始の間に佳酒を出し、後では惡酒を出すのに、君はどうして最後迄佳酒をしまつて置いたのか」と、新郎に尋ねたさうである。其の如く世間の人は、兎角何事にも誤魔化しが多い。最初の見本と後日の商品とに相違あり、當座の勤振と不斷の勵方とが齟齬して居る。併しながら基督の主義は、後になる程善い物を提供する主義である。其の宗教は又「信仰より出でて信仰に進み」恩寵に恩寵を加へられ」又「力より力に進む」所の、奥行のある宗教である。随つて神様を信仰しない人の世渡は、通常「始吉、後凶」といふのであるに拘らず、耶蘇に従ふ者の運命は「始吉、後上々吉」といふのである。私共は後になる程味の出る信仰生活に、尙も深くわけ入りたいものである。

第九章 ニ コ デ モ

参考「ヨハネ傳三章一節至二十一節」

「人新に生れずば、神の國を見ること能はず。」(ヨハ三・三)
 カナの結婚式が済んで後、耶蘇は其の母、兄弟、及び弟子達と一緒に、ガリラヤの湖水の西北の岸にある、カペナウムといふ町へ、お下りになつた。これは其の邊の商業の中心にて、税關もあれば兵營もある、可なり繁華な地であつた。此のカペナウムは後に耶蘇の傳道上の根據地となつたのである。かれこれするうち、ユダヤ人にとつては大切な、過越の祭が近づき、全國から多くの人々がエルサレムへ上るので、耶蘇もそれを機會に都へ上り、公けの傳道事業に取りかゝり給ふこととなつた。

エルサレムに御滞在在中、或夜ユダヤ人の宰なるニコデモといふ人が、耶蘇を訪

ねて來た。而していふには「先生、あなたはたゞのお人でない、屹度特別に神様から遣されたお方であると思ふ。といふわけは、若し然うでなくば、あなたが爲さる様な種々不思議な人助の業は、到底尋常の人には出来ないことであります」と、申上げると。耶蘇は其の方の事には返事をしないで、直に靈魂上の大事を語り出で、「誠にまことに我汝に告ぐ、人新に生れずば、神の國を見ること能はじ」と仰せられた。これは人間は誰も皆一度生れ更らないと、神様の前に一人前の人間たる資格がないものぞとの御教である。ニコデモは其の意味を解し兼ね、「併し私共の様に好い年をしたものが、今一度母の胎に入つて出て來らるゝものでもなし。新に生れるといふ御教訓は、どうも其の意を得兼ます」といふ故、耶蘇は再び語をつぎ、「誠にまことに汝に告ぐ、人は水と靈とに由りて生れずば、神の國に入るに能はず。肉に由りて生るゝ者は肉なり、靈に由りて生るゝ者は靈なり。汝等新に生るべしと我が汝に言ひしを怪むな。風は己が好む所に吹く、汝そ

の聲を聞けども、何處より來り、何處へ往くを知らず、凡て靈に由りて生るゝ者も斯の如し」と仰せられた。これは人間が生れ更るといふのは、肉體の上の事ではなくて靈魂の上の話である。人は其の肉體が母から生み落されただけで満足せず、是非共神様の御靈に由りて、其の靈魂を入れかへられねばならぬ。これが即ち新に生れるといふことである。人間の靈魂が神様の御靈に由りて生れ更るのを、不思議な事のように思ふか。成程不思議といへば不思議に相違ない。併し此の世には、人間の智慧や分別で説明の出來ないことが幾らもあつて、現に今窓の外を吹く彼の風にした處が、お前には何處から吹いて來て、何處へ去るかわかるまい。それにも關らず風の吹いて居る事實は、其の物にぶつかる音を聞けば直にわかる如く、人の靈魂が神様の御靈によりて生れ更るといふのも、其の筋道は鳥渡理解し難い様であれど、併し實際神様の御靈によりて、人の心を變化せられた證據を見れば、直に其の事實を承認せらるゝであらうとの、御教訓である。

今此の物語に由つてニコデモの事を考へて見るに、其の當時彼は凡そ三つ程の了簡達をして居つた様である。

第一、ニコデモは自分の事を棚にあげて、他人の事のみ心配して居つた様である。即ち彼は耶蘇が哀れな病人や困窮人など、濟度し給ふ有難き御業に目をとめ、「あなたがなさる、種々不思議な人助けの業は」などいって、感服しながら、さして自分自身の問題となつては、一向浮かりして其の意を諒解し兼ねた様である。ニコデモは耶蘇の御事業が、下層の人民に大切な事は十分に認めながら、それが一個の紳士たる自分に、どんな關係があるかを考へなかつた。其の如く今も宗教は愚夫愚婦の爲には結構であるとか、又救世軍は下層の人民に對しては、極めて適當であるなど稱へつゝ、扨然ういふ自分が所謂愚夫愚婦、又は下層の人民と同じ様に、神様の前に罪が深く、隨つて耶蘇に救はれる必要のあることに、思ひ及ばぬ者が多くある。昔預言者ナタンは、ダビデ王が大罪を犯したのを責め、「罪人とは誰の

事か、王よ、汝こそ其の罪人なれ」というて、王の冠を戴いたダビデを震ひ慄か
 しめたことがある。聖書に「義人なし、一人だになし」とあり。全世界の人間は
 皆神様の前に罪人にて、悉く耶蘇の救を要するもの故、私共は此の新に生れよと
 いふ御教を他事と思はず、屹度我が身に引當て、考へることが、何より大切で
 ある。

第二、ニコデモは又肉體の上の事のみ考へて、靈魂の事を等閑にして居つた。
 即ち耶蘇が人の肉體上に行ひ給ふ慈善博愛の御業には感心しながら、一旦靈魂上
 のお話になると、一向其の道理を合點し兼ねた様である。其の通今も基督敎團體
 の社會的運動や、又は救濟事業等には感服しながら、其の靈魂を救ふ傳道事業の有
 難味に至つては、一向合點の行き兼ねる者が多い。併しながら私共は人の靈魂を
 罪から救うてのみ、眞に其の人を一切の禍から救ふことが出来るのである。「眞の
 慈善とは、人をして慈善を受くる必要なものとならしむることである。」而して

此の如きは、唯耶蘇の救に由つて其の人の靈魂を入れかへてのみ、最も有効に成
 遂げられるべき事である。

第三、ニコデモは又、己が品行方正の道德家たることを以て足れりとし、進ん
 で自分に耶蘇の救を求むべき必要のあることを、知らなかつた様に見える。併し
 ながら人が若し自分を世の惡黨無賴漢など、仕方のない人間にのみ比較すること
 を止め、反つて我が今日迄の行を其の本心の鏡に照して調べ、聖書の御教に引當
 て考へ、正直に己を神様の前に吟味するに於ては、それこそ誰一人我が犯せる
 罪の山ほどある事に心付き、胸を打つて、耶蘇の御救を求め必要な感ぜぬもの
 はない筈である。「なきなど人には言うてありぬべし、心に問はゞ何とこたへん」
 『わが心鏡にうつるものならば、さこそ姿のみにくからまし。』格別に困難なるは、
 私共が平生其の悪いと思ふことを止め、善いと思ふ事を行ふ力の足らず勝なこ
 とである。「いくたびか思ひ定めて變るらん、たのむまじきはわが心なり。」是に至

つて私共は、どうしても神様の御靈に由つて其の靈魂を入れ更へられ、新しき心を有つた人間にして戴く必要を、切實に感ぜざるを得なくなる。耶蘇の宗教は、人の靈魂を入れ更へる宗教である故、それでこそ始めて眞に人を救ひ、又世を救ふことが出来るのである。

今神様の御靈に由つて人の靈魂を入れ更へられるといふは、不思議な話の様であれど、私共は風の吹く音を聞いて風の吹いて居る事實を認める如く、靈魂を入れ更へられた人の身の上を見れば、其の靈魂を入れ更へらるゝ事實を、明かに認めることが出来るのである。或る宗教家がサムマフィールドといふ人にむかひ、「貴君の御誕生地は」と尋ねると。答へて「リバープールと、ダブリンとであります」といふ。「でも御誕生地が二ヶ所あるといふのは、可笑いではありませんか」と問返すと。「貴君は人に宗教を教へる身でありながら、尙その事が解りませぬか」というたさうである。申す迄もなく、前のリバープールは其の肉體の生れた所で、後

のダブリンは靈魂の所に生れた所であつたに相違ない。此の如く人は皆神様の御靈に由りて、其の靈魂を入れ更へられねばならぬ。これが即ち耶蘇の救といふものである。而して唯此の救に由つてのみ、私共は根本的に人を救ひ、又世を救ふことを得るのである。

第十章 サマリヤの女

参考【ヨハネ傳四章一節至四十二節】

『我には汝等の知らぬ我が食する食物あり。』(ヨハ四・三二)
 エルサレム及びユダヤに滞在すること七八ヶ月の後、耶穌はサマリヤを経て、ガリラヤに歸り給ふこととなつた。サマリヤを御通行の際、弟子達が町へ晝飯のパンを買ひに行つた間に、耶穌は井側に休んでお在になると、そこへ一人の婦人が水をくみに來た。これは其の國の風として、銘々釣瓶を持つて水くみに出かけるのであつた。耶穌は其の婦人にむかひ『我に飲ませよ』というて言をかけ、それを話の端緒として、神様の有難い御恵を湧き出づる水に喩へ、諄々として説いてお聞かせになつた。即ち耶穌が仰せられるには、お前はこれ迄五人の夫を取りかへた女にて、其の都度今度こそは、仕合に世渡が出来るであらうと思つた甲斐も

なく、いつも案外な故障が起り、あゝ嬉しいと思つたのは、ほんの束の間のこと
 で、直に傍から不満足と心配苦勞とに陥つた経験があらう。譬へば此の井からく
 む水を飲んで、喉を濕したかと思へば、程なく復渴を覺える。斯て水を飲んだか
 と思へば、渴き、飲んだかと思へば、復渴く。此の如きものが此の世の幸福満足と
 いふものゝ常である。それ故お前は此の後、此の世の歡樂と、肉體上の満足とを
 求めることを止め、眞の神様を信じて、神様が心の中に下さる眞の仕合と喜樂と
 を、経験する者とならねばならぬ。『神は靈なれば、拜する者も靈と眞とを以て拜す
 べき也。』眞の神様は靈體にて在す故、之を拜む者も亦、其の心と誠とを以て拜ま
 ねば役に立たない。今自分は然うした眞の神信心の道を教へ、世の中の罪と禍
 とに苦しむ者を救はん爲に、神様から遣された救主であるぞと。旅の疲勞を忘れて
 懇ろに説き諭し給うた故、女は有難涙に咽びつゝ、釣瓶をそこに置いた儘、急ぎ
 村邑に歸つて近所の人達にむかひ、大聲に、圖らず井側でも目にかゝつた救主耶

蘇の事を吹聴すると。多くの人々は村から出て来て耶蘇の御前に集り、やがて御案内申上げて其の村に歸り、二日程御滞在を願うて、尙も引續き其の有難い御教を承はり、信仰の心を起す者も多く起つたのである。

第一、耶蘇が旅の疲勞と空腹とを忘れて、圖らず井側で出會うた一人の女に、斯く迄熱心に傳道なされたことを見れば、其のどれ程靈魂を愛する熱情に満ち溢れて、お在なされたかといふことが解る。私共が人を信仰に導き、罪人に救の道を傳へるのも亦此の如く、何も救世軍の會館や、基督教の會堂に集つた時だけ、思ひ出した様に之を力めるのでなく、反つて年中到る處、それこそ井側でも、道の辻でも、店先でも、工場でも、乃至は汽車電車の中でも、始終心がけて居つて、之を試むべきものである。私共は時を得るも時を得ざるも、勵みて道を宣傳へねばならぬ。人の靈魂は、全世界よりも貴きものである。神様の御獨子耶蘇は其の貴き靈魂を、罪より救はん爲に態々此の世に降り給うたのであれば、私共も亦人の

の靈魂を愛し、其の救の爲に、有らん限の力を盡して働かねばならぬ。

第二、耶蘇は唯一人のサマリヤの女を導く爲に、容易ならぬ勤勞をなし給うた。

耶蘇は時として數千人、或は數萬人を相手に説教し給うたこともあれど、亦好んで唯一人の人を相手に、膝詰にて諄々として教を説き給うたことを見受ける。其の如く私共も亦、一人一人の救の爲には、どんな勤勞をも厭はぬ覺悟で、そのために働かねばならぬ。始めて日本に基督の道を傳へたザビエーは、「一人一人の救の爲とならば、一萬度鞭で毆たれても苦しくない」というて居つた。ザビエーは此うした精神にて、織田、豊臣時代に日本に渡來し、單獨で不思議なほど大な働をしたものである。何が親切だかというて、人を神様に導く程の親切はなく、亦何が大切だかというて、人の靈魂を罪から救ふ程大切な事業はない。私共はもつともつと一人々々の知人朋輩を、基督に導く爲に奮闘せねばならぬ。

第三、耶蘇は井側であるから水の喩を用ひ、相手が無學な婦人であるから平た

い言語を使うて、奥深い神様の御教を解り易く説いてお聞かせになつた。其の通り私共も知つた振をして、明白なる神様の御教を、態々小六かしく説明する必要はない。反つて成るだけ解り易く、誰にでも得心の出来る様に、之を教へることを心がけねばならぬ。大將ウイリアム・ブリスが、其の子息と話をして居られた時のことである。假に今、主婦と女中と二人居るとして、それに宗教を説くには何うするかといふことになり。子息が、「私は主婦と女中とに半分宛話を致します」といはれると、老大將は答へて「私は専ら、女中相手に話をする、なぜかといふに、女中に解る話なら、自然主婦にも解る筈だからである」と、言はれたことがある。私共は亦力めて平たく解り易く、どんな一文不通の人にも合點の行く様に、神の福音を宣傳へねばならぬ。

第四、サマリヤの女は、自分が基督の御恵を受けると、直に飛んで行つて其の證言を立て、村の人達を御許に連れて來た。此の如く人が眞に神様の有難いこと

を身に経験する時には、ちつとして居られなくなるものである。譬へば大病に罹つて居つた人が、何か不思議な良藥を得て急に病が癒えたとすれば、黙つては居られず、必ず同病の人に其の藥を推薦するのと同じく、私共が若し罪の難病を癒されて、靈魂上の健康體となつたことが事實であれば、私共も亦黙つては居られず、進んで世の罪と禍とに惱む人々に、耶穌の救を宣傳ふるに至る筈である。即ち使徒パウロが「我福音を宣傳ふとも誇るべき所なし。已むを得ざるなり。若し福音を宣傳へずば我は禍害なる哉」というたのは、其の事である。サマリヤの女は姿も振も忘れ、大膽に路傍に立つて、耶穌の恵を證言した。其の如く私共は亦野外にでも、路傍にでも、機會を捉へて、己が受けたる救の實驗を證言せねばならぬ。「私は尙信仰の日が浅いから」と言譯をするであらうか。サマリヤの女は耶穌に御謁見をして、まだ漸く一時間経つか經ぬに、早くも單獨で野戦を營み、多くの人々を救主に導いたではないか。「之を用ゆれば虎となり、用ゐざれば鼠となる。」

思ひ切つて働いて居る中には、段々有力な働人にもなれるもの故、私共は心がけて、兎も角も及ぶ丈、他人の救の爲に力を盡さねばならぬ。其の間に一日一日と救靈の経験が増し、神様の御助が加はり、案外大な御用を勤めらるゝ様になること、疑がない。

第五、パンを買うて歸つた弟子達は、耶穌が空腹を覺えて居らるゝことと思ひ、急ぎ食事をすゝめると、耶穌は答へて「我には汝等の知らぬ我が食する食物あり。我を遣し給へる者の御意を行ひ、その御業を成遂ぐるは、是わが食物なり」と仰せられた。これは神様の思召に従ひ、靈魂を救ふ爲に働くことが、三度の食事も愈つて快樂であるとの意である。古語に、「善をなすこと最も樂し。」又「他人を喜ばす喜にまさる喜なし」など、いうてある。而して靈魂を罪より救ふことは、他人を喜ばす最上の方法にて、自分自らに取りては、復となき大なる快樂である。私共は三度の食事よりも愈つて善を爲すことを樂み、殊に罪人を救に導くこと

を無上の喜として、世に生存へたきものである。

第十一章 歸省

参考【ルカ傳四章十六節至三十節】

『預言者は己が郷にて喜ばるゝことなし。』（ルカ四・二四）

『故郷忘じ難し』といふことがある。古里は何時になつてもなつかしいものである。耶蘇はユダヤ、サマリヤの傳道中、御同伴になつた弟子達を一先其の家に返し、御自分には亦久し振に、郷里なるナザレにお歸りになつた。或る安息日の朝、耶蘇は幼い時から通ひつけの會堂に出席し、其の手に渡された舊約聖書の一部を取上げ、其の中から、

『主の御靈我に在す。これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、我を遣して囚人に赦を得ることゝ、盲人に見ゆる事とを告げしめ、壓へらるゝ者を放ちて自由を與へしめ、主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり』

といふ一段を読み、そこに居列ぶ人々に向ひ、『此の聖書は、今日汝等の耳に成就したり』と仰せられた。といふ意味は耶蘇は御自身、神様の御靈の宿れる御方に、貧乏人に福音を傳へ、心配苦勞のある者を慰め、罪の捕虜を放ち、惡の奴隷を自由にし、靈魂上の盲人の目を開き、終には世界の隅々隈々迄も、神様の御意の行はるゝ代を來らす爲に、現れ給うたものであるとのである。さうすると最初の程は、感心して聞いて居つた會衆が、後には大層腹を立て、『何だ、彼はヨセフの子ではないか、飛んでもないことを言ふ奴だ。殺してしまへ』といふ様な騒動となり、終には壑から突き落すつもりで耶蘇を町の外迄連れ出したが、耶蘇は少しも逆はず、反つて『預言者は己が郷にて喜ばるゝことなし』といひ、靜に群衆の中を通つて出で去り給うた。

此の殺風景なる物語の中から、私共の學ぶべき教訓を尋ねて見るに、第一、耶蘇はナザレにお住居の間、幼い時から安息日毎に、必ず定つて其の會堂に出席し

てお在なされた。其の通今日の私共も亦、どんなにか都合して、毎日曜日には必ず、救世軍の小隊、又は基督教の教會に出席する様にあり度ものである。一週間に一日、平常の仕事をして専ら自分の心靈を養ひ、又他人を信仰に導く爲に盡すのは、至つて大切な事である。明治の初年我が日本に、初めて日曜日を休む制度を持込んだ時、其の頃の人達は、西洋人が日曜日を休むから、日本でも然ういふ風にし様といふ位のこと、別段深い思慮もなく、中には和蘭語で日曜日の事を「ゾンタク」といふのを、漢字で「吞澤」と譯し、此の日は一日仕事を休み、澤山酒を飲んで骨休をするのだなどと、言ひ出した者もあり、東京邊では今日迄も、日曜日の事を「吞澤」土曜日のことを「半吞」などいふ風が遺つて居る。そこへ行けば、支那人が日曜日の事を「禮拜日」と譯して居るのは、餘程日本のより意味が明白である。兎もあれ、私共は何とかして、もつと日曜日を休み、唯休むだけではなく、其の日互に打寄つて神様を禮拜し、自分共の靈魂を養ふばかりか、他

人を救に導く爲に働く風を、盛にし度ものである。草を刈るには折々鎌を磨くことが大事な如く、生き甲斐ある世渡をし度と望む者は、どうしても殊に一週一日を、安息日として守る必要がある。

第二、耶蘇は先方の好惡如何に關らず、大膽に信仰の道を郷里の人々に傳へ給うた。其の如く私共も亦己が神様から受けたる恵を、同じ郷里、同じ學校、同じ勤先、又は同じ軒下に住む者等、凡て最寄の人々に證言せねばならぬ。私共の宗教は之を其の毎日顔を合す人達に推薦し得る程、眞實なものでなくてはならぬ。私共の救は又、始終自分の行を見て居る人々に、憚らず勧誘し得らるゝ位、正確現實のものでなくてはならぬ。

第三、耶蘇は「主の御靈我に在す、これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ云々」といふ句を讀み、「この聖書は、今日汝等の耳に成就したり」と仰せられた。耶蘇は神様の御靈の權化である。聖靈に充溢れた方であつたればこそ、

あんな風に靈魂の救の爲にお盡し下さることが出来たのである。それと同じ様に、今日神様の御命令を受け、救靈者として働く私共も亦、神様の御靈にて満され、其の御導に従ひ、其の御力に由りて、罪人の救の爲に戦ふ様でなくてはならぬ。神様の御靈は二つの方面から、私共今日の救靈者と共に働き給ふ。即ち一つは其の相手とする罪人の心の中に働き給ふことにて、今一つは救靈者自身の中に働き給ふことである。(一)神様の御靈は救靈者自身を潔め、神様の御用を勤むるに足る器とならしめ、これに靈魂を愛する熱情を燃し、これに其の言ふべきことを教へ、其の爲すべき所を示し、上よりの力を授けて、人間業ならぬ不思議なる活動をなさせ給ふ。(二)それと同時に神様の御靈は又、救靈者が相手とする罪人の心に働き、これをして罪を認めしめ、救を求めしめ、其の心を潔め、之を罪より救うて、進んで他人の救の爲に立ち上るに至らせ給ふ。或時一人の救世軍人が、其の毎朝顔を合す汽車の車掌に、救の話をしろといふ神様の御啓示を受けたが、其

の車掌が如何にも、筋骨逞しき屈強の男であつた故、つい恐気がさして、躊躇しながら三週間を経過したが、何時迄然うして居らるべきでもない故、或朝思切つて其の男に信仰の事を話しかけると、彼は案外柔和に之を聞取るばかりか。「實は三週間ほど前から、頻りに此の世の浮いた生活に嫌焉ない思がし出し、誰か信仰の事を話して呉れる人があれば可いにと、そののみ心待に待つて居つた處であります」と、いうたさうである。即ち神様は一方に其の救世軍人の心に働き、「往いて彼の車掌に話れ」と命ずると同時に、他方に於ては、先に廻つて、其の車掌の心に「誰か信仰の事を話す者があつたら、喜んで聞け」と言付けて、お在になつたのである。此の如く眞の救靈者は、斷えず神様の御靈と偕に在り、其の御力に由り、其の御導の儘を行つて居るべきものである。

第四、耶穌はナザレの人民から迫害を蒙り、「預言者は己が郷にて喜ばるゝことなし」というて、そこを立去り給うた。諺に「燈臺下暗し」といふ如く、ナザレの

人民は、現在自分共の間から現れた、救主を認めることが出来なかつたのである。此の如く人は案外目前の事物を判断し損ふことが多い。私共の幼い時の事など知つて居る人達は、私共が中頃基督に救はれて、他人の救の爲に起つやうになつた心事を理解することが出来ず、唯柄にもない真似をする痴漢、身の程を辨へぬ虚妄者とのみ、認める例が少くない。それ故眞面目に神様に事へ様と思ふ者は、どうしても先づ、其の郷里の人々から、誤解や嘲弄を受ける位の覺悟がなくてはならぬ。新島襄氏が米國から歸つて、久し振に郷里上州安中に歸省せられた時、『ふる里に飾る錦はこの中、身に纏ふべき時にあらねば』と詠まれたのは、眞に見上げた精神である。誠に神様に忠義を盡し度と望む者は、先づ古里に錦を飾るなどいふ小さい名譽心を棄て、反つて其の郷里の父老や、又は知人から嘲弄罵言を受け、果は迫害を蒙ることさへ、覺悟して起ち上る様でなくてはならぬ。

第十二章 人を漁る者

参考「マタイ傳四章十七節至二十二節」

「我に従ひ來れ、さらば汝等を人を漁る者となさん。」(マタ四・一九)
 耶穌が郷里ナザレを去り給うた後のことである。或日ガリラヤの湖の岸邊を歩み、そこに網うつて居るペテロと、其の兄弟アンデレとを見、「我に従ひ來れ、我汝等を人を漁る者となさん」と仰せられると、二人は直に網を棄て、耶穌に従うた。そこから進んで、今度はゼベダイといふ者の子にて、ヤコブとヨハネとの兩人が、舟にて網を繕ひ居るのを見、これをも御招になると、兩人は其の父と雇人とを遣し、直に耶穌に従うた。此の四人の者は兼々耶穌のお弟子となり、既に先頃は其のお伴をして、ユダヤ、サマリヤの地方を遍歴した位であつたが、今はその特別なる御命令により、從來の職業を擲つて、全く宗教に身を委ね、今時の教

會で謂ふ傳道見習生、救世軍で謂ふ士官候補生の様な者となつたのである。

今此の最初の傳道見習生、又は士官候補生は、一體どういふ人物であつたかを考へて見るに、

第一、彼等は質朴なる漁人であつた。彼等は平生骨身を惜まず、勞働して居る人達にて、現に此の日も例に由りて一所懸命勞働して居る最中、忽ち耶穌の御招を蒙りたるものである。此の如く神様は何時の代にも、骨惜みをせず働く人間を用ゐて、其の御用を勤めさせ給ふ。神様は懶惰者が嫌である。懶惰者は神様の僕たるよりも、寧ろ惡魔の部下たるに適當して居る。それ故諺に「懶惰者の腦髓は惡魔の工場である」というてある。併しながら勤め働くことは人の譽である。私共は唯勤勉力行に由りてのみ、神様の前に生き甲斐ある生涯を送ることが出来る。ラスキンの言に「諸君は何故勞働者を輕蔑するか、勞働者でないものは懶惰者ではないか」といふことがある。私共は亦骨身を惜まず勞働することに由

りて、神様への御奉公を全うせねばならぬ。

第二、彼等は眞實欺かざる人であつた。元來宗教は、人の心の奥迄鑿給ふ神様をお相手とするものゆゑ、其の信者とか、または教師とかいはるゝものが、聊かたりとも虚偽や作爲を用ゆる餘地がないのは、明白である。それにも拘らず不思議なのは、何時の代にも唯人に見られんが爲に其の義しき事を行ひ、表面に信仰家博愛家を装ひながら、其の内實は似てもつかぬ偽善者が、往々にして現れ出づることである。それ故耶穌は其の時代の斯る偽善者輩を戒め、「汝等は白く塗らる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまたまの穢とにて満ちて居るではないか」と仰せられた。併し乍らガラヤの湖畔から擇まれて、耶穌のお弟子となつた四人の者は、飽く迄も眞實熱誠なる人物であつた。彼等は世の輕薄不信仰なる風習に與せぬと同時に、さりとして亦其の頃の鑄型に入つた様な宗教に満足し得ぬ人達であつた。それ故に彼等は正直なる心を以て、耶穌の言はる

る所を聞き、一旦成程と合點した以上、命を的に、之を擁護することを厭はなかつたのである。後にペテロとヨハネとが裁判官の前に曳かれ、以來耶蘇の事を教へてはならぬと申渡された時、答へて、「我等は見しこと、聽きしことを、語らざるを得ず」と、言うた處など見れば、彼等がどれ程眞實熱誠の人であつたか、大抵想像が附くのである。而して神様はいつの時代にも、唯此うした眞實欺かざる人物を用ゐて、其の御業を爲し給ふのである。

第三、彼等は又一切を棄て、耶蘇に従うた者である。即ちペテロは妻もあり、妻の母をも引取つて世話する身でありながら、境遇の困難を排除して耶蘇の召に従ひ、ヤコブとヨハネとは、數人の雇人さへ使ふ氣樂な家庭を辭し、甘んじて世の救の爲に流浪する身となつたのである。後にペテロが耶蘇に對ひ、「我等は一切を棄て、汝に従ひたり」と申上げた時、耶蘇は答へて「誠に汝等に告ぐ、我がため、福音の爲に、或は家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は子、或は

田島をすつる者は、誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家、兄弟、姉妹、母、子、田島を迫害と共に受け、又後の世にては永遠の生命を受けぬはなし」と、仰せられたことがある。彼等は一切を棄て、耶蘇に従うた故、能く神様に用ゐられて、今日迄も其の功德を、全世界に遺す程の人物となつたのである。

第四、彼等は又其の信仰を神様に置く人達であつた。ルカ傳の第五章を見ると、此の事の在つた前夜、彼等は徹夜睡らず魚を漁つたけれ共、一尾もとれないで、失望し切つて居る所へ、耶蘇がお出になり「深處に乗りいだし、一網うつて見ろ」と仰せらるゝ故、其の通にすると、こは如何、網も張裂けんばかり大變な獲物があつた。然る後耶蘇は彼等に「汝今より後、人を漁らん」と、仰せられたと書いてある。即ち耶蘇は彼等を召して人を漁る者とならしむるに當り、豫め此の大切な事業が、人の經驗や、又は勤勞に由つてのみ成功するのではなく、全く唯神様の御力にこれ頼るべきものである道理を、實地に就いて教へ給うたのである。而し

てこれは彼等が、將來永久に忘れることの出来ない、大切なる御教訓であつた様に見える。

第五、耶蘇は彼等にむかひ、「我汝等を人を漁る者となさん」と、仰せられた。

即ちこれ迄は彼等が魚を漁る者であつた如く、此の後は人を漁る者になしてやるとの御言である。人を漁るといふのは、言ふ迄もなく人を滅亡の中より救ひ上げるといふ意味である。思ふに魚を漁ること、人を救に導く事との間に、類似の點が決して少くない。

(一) 魚を漁るに大切なるは、魚の居る所に出かけることである。其の如く私共は又人の居る所に出かけて、人を救に導かねばならぬ。救世軍の野戦や、「ときこのゑ」賣や、戸毎訪問等は、此の主義から割出した運動法である。

(二) 魚を漁るには香しい餌を用ゆる必要がある。其の如く私共は又有難い、仕合な、人を罪から救ふ力のある宗教を宣傳へて、靈魂を耶蘇に導かねばならぬ。

彼の冷い神學上の講釋や、又は型に嵌つた様な儀式的の宗教では、人の心へ捕へることが出来ないのである。

(三) 魚を漁る者に一つの大事な心得は、自分の姿を見せぬことである。漁夫の姿が水に映れば、魚は忽ち逃げてしまふ。其の通人を漁る者に大切なる注意は、亦決して己を現してはならぬことである。「我基督と偕に十字架に釘けられたり。最早我生くるに非ず、基督我が内に在りて生くる也」と、斯ういふ覺悟のある人にして、始めて眞に人を漁る者となることが出来る。

(四) 魚を漁る者は晴雨を問はず、濤風を恐れず、苦勞難儀を冒して働く必要がある。其の通、人を漁る者は亦「機を得るも機を得ざるも常に勵み」「基督の爲に微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に遭ふを喜び」始めて相當の成功を獲らるべき筈のものである。

第十三章 山上の説教

参考【マタイ傳五章、六章、七章】

『天にいます我等の父よ』（マタ六・九）

マタイ傳第五章、六章、七章の三章に互つて、耶蘇が或る山の上でなされた大説教が載つて居る。言傳に由れば、これはカペナウムから三里ばかりの處にて、ガリラヤの湖の西に當る、ハツチン山といふ、海拔一千尺程の山上であつたといへど、今確實なことは解らない。

耶蘇は此の御説教の中に、神様を信ずる人間は如何なる資格を備へて居るべきか。又其の幸福なる有様は如何といふことから説き起し、然ういふ人々が此の世に對する義務責任を教へて後、彼の新しい御教と、今日迄在來の宗教との關係を示し、それより宗教上の義務、社會上の義務等、私共が是非共心得て居らねばな

らない大切な眞理を、細々と説諭し給うたのである。私は今然ういふ大切な御教を、一々考へて居る邊がない故、唯一つ、此の御説教の中に、耶蘇が祈禱の模範として教へ給うた、所謂『主の祈』の最初の一句、『天にいます我等の父よ』といふ語に就いて、少しくお話し申上げ度と思ふのである。

昔梅田雲濱といふ勤王家は、『春秋』といふ書物にある、『元年春王正月』といふ一句にもとづいて尊王論を唱へ、幕府を倒して皇室を擁護し奉つるべきことを、主張したといふことである。それと似つかはしい様な話であるが、私共が若し此の『天にいます我等の父よ』といふ一句の意味さへ、十分理解することが出來たならば、基督の御教の大主義、大精神は、大概之を曉ることが出来るというても可い故、今殊に此の一句を擇んで、研究して見たいと思ふのである。

第一、耶蘇は神様のことを『天にいます我等の父よ』と呼ばせ給うた。『天にいます』といふのは、靈なる神様といふと同じことである。又『我等の父よ』とい

ふのは、愛なる神様といふと同じ意味である。靈にして愛なる神様といふことを、言ひ換へたのが、即ち、「天にいます我等の父よ」の一句である。而して此の靈にして愛なる神様を、我が靈魂上の父上として、敬愛し奉つるに勝す宗教上の觀念は、他にないのである。舊約聖書を讀んで見ると、モーセの頃には、神様を御主人とし、人間を其の僕として教へて居る。其の時代には神様を敬ふことはあつても、之を愛することは知らなかつた。随つて神様と人間との間に距離があり、遠慮があつて、何となく打ちくつろがない節があつた。それが預言者の時代になつては、往々にして神様を夫に譬へ、人間を其の妻として教へて居る。併しながらそれでは又、神様を愛するといふことはあつても、之を敬ふ念が足らず、餘りに狎れて之を侮る様な恐がないでもない。そこへ一番あしまひに耶穌基督が現れて、神様は人間の父上である。人間は其の子であると示し給うた。父上といふからには、之を敬ふのは勿論であれど、さりとして唯其の御前に恐れ慄いてのみ居る程に、

之を憚るわけではない。又父上といふからには之を愛するのは勿論の事であれど、さりとして亦之を狎れ侮つて敬意を缺ぐ程、慎みを失ふ心配はない。之を敬ふのみならず愛し、愛するのみならず敬ひ、敬と愛とが二つながら備つて、随分と莊重に、しかも快活に、神様の前に毎日の世渡を續けて行く間に、眞の神信心の妙味は見出されるのである。私共が神様を「天にいます我等の父よ」と呼び奉つることが出来るのは、神様が耶穌基督に由りて賜はりたる大なる特權である。

第二、神様が父上であるからには、私共人間は皆其の子供である。子は子であるけれ共、神様の思召に従はず、自分勝手な事を行ふ間、私共は父なる神様の前に放蕩息子同様の世渡をして居るものである。神様は私共が斯く罪を犯し、放蕩息子同然の世渡をして居る有様を憐み、之を其の罪と禍との中より救はん爲に、救主耶穌を此の世に遣し給うた。歌に「鐘太鼓、聲のかれたが親さうな」といふことがある。鐘と太鼓で迷兒を探す一隊の中に、取分け聲をからして狂氣の如く

叫んで居るのが、即ち其の迷兒の親だといふのは、如何にも人情を穿つた話ではないか。それと同じ様に、神様は又罪の衢に彷徨うて、歸ることを忘れて居る世の人を引戻さん爲に、御獨子基督を此の世に遣し給うたのである。然も其の基督が十字架に懸つて迄も、罪人の救の爲に御苦勞下されたことを見れば、其の間に天の父様の貴き御愛心が窺はれる。「夫れ神は其の獨子を賜ふ程に世を愛し給へり。凡て彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得ん爲なり」とあるのは、其の事ではないか。

第三、神様が父上であり、人間が其の子供であるといふからには、随つて世界の人類は皆兄弟同志であることが解る。私共は自分勝手の手のみ考へず、亦他人の爲を思ふ様でなくてはならぬ。自分一人罪から救はれて、天國に入る目當が出来たのに満足せず、進んで世の人を滅亡より救ふ爲に、最善の力を盡さねばならぬ。かくて親子、夫婦、兄弟姉妹が、互に相愛する位は愚か、資本家と職工との

間にも、お互が兄弟であることを記憶し、金持と貧乏人との間にも、共に同じ神様の子供であることを忘れず、老たるも若きも、賢も愚なるも、白哲人種も黄人種も、内地人も朝鮮人も、悉く皆神様を父上とする一大家族に屬することを知つて、互に己が欲する所を人に施す様になつたならば、それこそ天國は其の儘、地上に打建てられたものと謂ふことが出来る。而して耶蘇は然ういふ愛の世界を打建ん爲に、此の世に現れ給うた救主である。ずつと以前に、澁谷の邊に住む基督信者の有志が、毎月一回宛、順番に其の家々にて祈禱會を催したことがあり。或夜當時の司法次官三好退藏氏の宅で之を營むこととなつたが、其の頃矢張り澁谷に住んで居つた監獄改良家某氏は、數日前其の家に引取つた一人の出獄者を連れて、之に出席せられたのである。主人なる三好氏は司會者として開會の祈禱をさしげ、「神様よ、今夕茲に集られた兄弟達を恵み云々」といふ様なことを唱へられると、之を聞いて居つた彼の出獄者は吃驚した。何、兄弟達とか、兄弟達

とは一體どういふ意味であらう。私は國の法律を犯して、此の間迄も鐵窓の下に呻吟して居つた身ではないか。其の節の自分は看守の前にさへ、頭の上らぬ囚人であつたものを、其の看守の上に立つ看守長殿の、其の又上に立たる、典獄殿の、其の又つと上に立たる、司法次官閣下ともある御方が、今「此の兄弟達」と仰せられたではないか。して見ると私の様な極悪非道の人非人でさへ、神様の前には、司法次官閣下の兄弟になるわけであらうか。あゝこれは勿體ないことだ。有難いことだ。私はどんなにでもして、此の神様を信仰し、今から眞面目な人間にならねばならないと。唯其の祈禱の中の「此の兄弟達」の一語が、全く憐なる一出獄者を救うて、新しき生涯の門出をさすることゝなつたのである。神様は天に在す父上である。私共は其の子供である。それ故に世界の人類は皆同胞兄弟である。私共はイエスキリストに救はれて神様を愛し、又同胞を愛し、末終に此の世界を擧げて、愛の一大家庭となる迄は止まざる覺悟を以て、今から銘々、其の立場々々より奮闘努力する所がなくてはならぬ。

第十四章 十二使徒

参考「マタイ傳十章」

「視よ、我汝等を遣すは、羊を豺狼の中に入るゝが如し。」(マター一〇・一六)
 耶蘇が十二人の弟子を擇び、之を使徒となし、これに汚れたる鬼を逐出し、
 凡ての病氣を醫す權力を授け、天國の福音を宣傳へる爲に遣し給うた次第は、マ
 タイ傳第十章に詳かである。

第一、なぜ耶蘇が、十二人の使徒をお擇みになつたかといふことに就いては、
 其の前の章の終に、耶蘇が遍く村里を廻り、其の會堂にて教へ、民の中なる凡て
 の病人を癒してちやりなされた事を記し、其の後に「牧ふ者なき羊の如く悩み、
 且たふるゝを甚く憫み、遂に弟子たちに言ひ給ふ「收穫は多く勞働人は少し。こ
 の故に收穫の主は、勞働人をその收穫場を遣し給はんことを求めよ」と、あるの

を見れば、大概其の事情を察することが出来る。耶蘇の御眼には、神様を知らず
 して罪の中に悩む世の人の状態が、牧ふ者なき羊の如くに映じた。それ故御自身、
 寢食を忘れて彼等の救の爲にお盡しなされたばかりでなく、別に十二人の使徒を
 さへ擇び、同じ御目的の爲に働かせ給ふことゝなつたのである。昔一休和尚は酒
 を飲んで騒いで居る人を指して、「彼處に骸骨が踊つて居る」と、いうたさうであ
 る。大將ウイリアム・ブースは又或時、其の部下の救世軍士官を戒め、「彼の街路
 を歩く人々の靴音を聞け、此は直ちに地獄に急ぐ足音ではないか」と言はれたこ
 とがある。此の如く私共の心の眼が一度開けたならば、私共は金ぐさりをぶらさ
 げた紳士の靈魂が、實は罪の鏈に繋がれ、笑顔を傾くる美人の胸の奥に、實は言
 ふに言はれぬ悲哀を包み、其の他凡て浮いた此の世の名利を追求める人々が、實
 は望なく神なき淺ましき生活を營んで居る状態が、其の儘に映じて、おつとして
 居られず、つひく我を忘れて、其の救の爲に起たざるを得ざるに至るのである。

使徒パウロが「若し我が兄弟、我が骨肉の爲にならんには、我自ら誼はれて基督に棄てらるゝも、亦我が願ふ所なり」というたのは、此ういふ靈魂上の實驗から、逆り出でた言であると思ふ。兎もあれ、耶蘇が此度十二人の使徒を擇んで己と偕に置き、又教を宣傳ふる爲に遣し給ふ様になつたわけは、全く世の人の罪に滅ぶる状を見るに見兼ね、彼等を救はしめん爲の御計であつたことが、明白にして毫も疑ふべき餘地がない。

第二、「使徒」といふ語の意味は、或る特別なる使命の爲に遣さるゝ使者のことである。而して十二人の使徒達が、如何に重大なる使命を神様から託せられて、其の爲に世に遣されたかといふ事實は、誰もよく知る所である。もつとも聖書の中には、此の十二人の外に「異邦人の使徒」と呼ばれる、パウロを始とし、他に數人、同じ使徒といふ名を以て呼ばれた人達がある。後世に於ては、新に或る一つの國に宗教を傳へた人を使徒と呼ぶ風があり。即ちアウガスチンは「英蘭の使徒」コロ

ンバスは「蘇格蘭の使徒」ボニフェイスは「獨逸の使徒」と呼ばれて居る。又は新に或る特別の方面に福音を播めた人を使徒と呼ぶ場合があり、即ち大將ウイリアム・ブリスの事を「貧民の使徒」と呼ぶなど、其の一例である。私共は然ういふ偉い人達の様に、新に一國、又は一方面に、救の原野を開拓する程の力がないであらう。併しながら私共は、亦銘々其の身を置く所の工場、會社、商店、學校、又は村落を、其の儘我が特別に遣された戰場と見做し、そこに耶蘇基督と彼の十字架とを紹介する爲に奮闘し、其の與へられた小き範圍に於て、一個の使徒たることが出来ない筈はない。否々これは屹度、私共にも成し得べきことである。亦是非共成し遂げねばならない職分である。

第三、十二人の使徒達の中には、其の當時誰一人として世に名を知られた者はなく、何れも皆地位とか、権力とか、學問とか、又知識とかを有たぬ人達のみであつた。併し乍ら、「神は智き者を辱かしめんとて世の愚なる者を選び、強き者を

辱かしめんとて弱き者を選び、有る者を亡さんとて世の卑き者、輕んぜらるゝ者、即ち無きが如き者を選び給ふ』御方である。神様は態と世の人から、何でもないう様に思はれて居る十二人を用ゐて、世界人類を救ふ爲に、大變な役割を勤めさせ給うたものと見える。此の如く神様は今も往々、案外の人物を擧げ用ゐて、とて人も人間業としては説明の出来ない様な働をなさせ給ふことがある。大將ウイリアム・ブリスの昇天に先だつ數月、或人が彼にむかひ、『大將よ、閣下が過る七十年間、神様に事へて、著しき恩寵を蒙られた祕訣を、唯一言に約めて言へば、何でありますか』と尋ねると。答へて、『それは大能の神をして、ウイリアム・ブリスに在る一切を有せ奉らんと、決心したことが是である』と、言はれたさうである。此の如く神様は今も、一切を其の御手に置く者を潔めて用ゐ給ふ。『エホバは遍く全世界を見そなはし、己にむかひて心を全うする者の爲に、力を現し給ふ』とあるのは、其の事である。

第四、十二人の使徒の中、一人の謀反人を除くの外、其の他は皆悉く創業の苦難に堪へ、患難と迫害とを凌ぎ、最後迄忠實を盡して、身を以て道に殉へたものである。即ちペテロは捕へられて十字架に懸けられ様とする時、『主耶穌と同じ死に方をするのは、勿體ない』というて、好んで逆磔にかけられ、アンデレは十字架の上に曝さるゝこと二日二夜、群衆に福音を語り續けて死に、ゼベダイの子ヤコブは刃の露と消えたが、其の臨終が如何にも勇ましかつたため、刑吏の一人は其の場で同じ信仰を告白して、首を斬られたといひ、ヨハネは煮えかへる油の中に投ぜられ乍ら、不思議に難を免れ、後バトモス島に流された。使徒達の中、年を終へたものは、唯此のヨハネが一人である。ピリポは十字架にかけられて死に、バルトロマイは棒で打たれた後十字架にかけられ、半殺にせられた上で首を刎られた。トマスは鎗にて刺殺され、マタイは戟にて貫かれ、アルバイの子なるヤコブは鞭たれた後、石にて打殺され、棍棒にて腦を碎き、これを布晒者に染料

として賣られた。而してヤコブの兄弟たるユダとシモンとは、共に十字架にかけられて死んだ、といふ傳説が存つて居る。此の如く基督の宗教は救主の血を以て立てられ、使徒達の生命を以て肥料せられ、其の後幾千幾萬の同じ獻身的の精神を有つた神の僕の受難に由つて、今日迄榮えて來たものである。そこで一つの問題が起つて來るといふのは、私共今日の神様の僕等は亦、さういふ昔の人達に恥ぢない丈の信仰を有つて居るか、眞實を盡して居るか、又は獻身的の御奉公を勵んで居るか、といふ事である。吉田松陰の歌に『ふるさふみ見ればくさくさ思ふなり、かゝらん時にわれ生ればや』と。私共は我が身を古の使徒達に引きくらべて、これに恥ぢないほどの忠勤を勵んで居らねばならぬ。

第十五章 弱者の友

参考【ルカ傳七章十八節至三十五節】

四) 『此の小さい者の一人の亡ぶるは、天に在す汝等の父の御意に非ず。』(マタ一八・一)

パブテスマのヨハネは、耶穌が神様の御獨子、世の救主であるからには、今に何か驚天動地の大運動を始め、一舉して世界を神様に従はする様な御計畫でもあることかと、待てど暮せど一向然うした氣色も見えない故、聊か失望の氣味にて、二人の弟子を耶穌の御許に遣し、『あなたは果して私が最初思つた通、神様から遣された救主で在るに在るか、又は然う思つたのが私の思ひ違でありますか。』と、尋させた。さうすると耶穌は答へて、『往きて汝等が見聞する所をヨハネに告げよ、盲人は見、跛者は歩み、癩病人は潔められ、聾者は聞き、死人は甦へらせられ、

貧しき者は福音を聞かせらる。凡そ我に蹟かぬ者は幸福なり」と、仰せられたとある。此の意味は、神様の獨子が人類を救ひ給ふ大事業は他でない。唯斯して世の最も氣の毒なる人間を、一人一人、靈魂と肉體との兩方面より濟度する中に、自ら世界の救は行はれるのである。この道理を間違なく諒解し得る者は幸福であるぞ、との御言である。耶穌が世界人類の救主であると共に、殊に世の貧民、病人、不具者、惡黨、其の他凡て不幸なる弱者の友として、此の世に生存へ給うたことは、唯此の御言に由つても明に觀て取ることが出来るのである。

然らば救主耶穌は、どんな風に世の頼邊なき弱者の爲に盡しなされたであらうか。

第一、耶穌は如何なる無智、貧窮、邪惡の人と雖も、其の胸の中には皆神様に肖せて造られた、貴き靈魂のあることを認め給うた。耶穌が觀給ふ所に由れば、全世界の人間は残らず神様の子供である。それ故どんな苦勞難儀をしても、これ

を救ひ度と思召したのである。「汝等慎みて此の小さ者の一人をも侮るな」、「この小さ者の一人の亡ぶるは、天に在す汝等の父の御意に非ず」と。耶穌は人間箇々の胸の中に、全世界よりも貴き靈魂のあることを知つて、これを尊重し給うたのである。

第二、耶穌は弱者を思ひやり給うた。餘り世の人から擯斥せらるゝ人間のみ相手にし給ふ故、其の弟子達に對ひ、「何故汝等の師は取税人、罪人等と共に食する乎」と答立をする者があると。耶穌は答へて、「健康なる者は醫者を要せず、唯病める者之を要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり」と仰せられた。歌に「慈悲の眼に憎しと思ふものぞなき、罪ある身こそ尙憐なれ。」耶穌は罪の深い人間ほど餘計に憐んで、之を救ひ給うたのである。又世の人から侮られる様な人間ほど、餘計に目をかけて之を撈り給うたのである。

第三、耶穌は彼等を肉體の上から救助し給うた。宗教は本來靈魂上の事ではあ

れど、其の靈魂は肉體といふ容器に入つて居るのであるから、若し必要ならば私共は靈魂の事と一緒に、其の人達の肉體上の世話迄せねばならぬ。例へば空腹で困つて居る人に差當り入用な物は一杯の飯である。之に小冊子を呉れた處で、それ丈では用をしない。或は刑務所から出て來たばかりで、身の落着所もない者に取つて、大切なるは之を世話して職業にありつかしめることである。唯説教だけ聞かせたのでは、満足に濟度することが出來難い。耶穌の奇跡は即ち、今で言ふ社會的事業の類である。耶穌は之に由つて人を肉體の上から救助しつゝ、併せて其の靈魂を救はれたものに外ならない。

第四、言ふ迄もなく、耶穌は靈魂を救ひ給うた。救靈は即ち最大の社會事業である。靈魂を救ふが故に、これ迄悪い習慣に捕へられ、罪の奴隷となつて居つた者が、改まりて堅氣な稼人となることが出来る。又靈魂を救ふが故に、これ迄よくと心配苦勞に壓へつけられて居つた人が、氣を取直して今一度新しき生涯

のし直しをすることが出来る。肉體だけ助けて靈魂を救ふことをしない社會事業は、焼石に水の社會事業である。其の永續的の効果が甚だ乏しいのは、更に不思議もないことである。救主耶穌の主義は、言ふ迄もなく靈魂を救ふことに由りて、其の人を救ふ主義であつた。それ故一人の中風患者を四人の男が擔いで來た時、其の肉體の痛苦を癒す前に、先づ其の靈魂の病氣を治療し、『汝の罪赦されたり』と言つて、周圍の人々に怪まれ給うたことがある。又或時三十八年の長患にて困り切つて居る大病人を癒した後、『視よ、汝癒えたり。再び罪を犯すな。恐らくは更に大なる惡しきこと汝に起らん』というて、其の靈魂上の注意を促し給うた様なこともある。世の貧民弱者を根本的に濟度し度と望む人々は、何よりも先づ耶穌の救を彼等に教へて、其の靈魂を罪より救ふことが大事である。

第五、耶穌は弱者を用ゐ給うた。前には世間の厄介者であつた人間が、基督に救はれて後は、人に迷惑をかけないのみならず、進んで人の益をなす様な例は幾

らでもある。サマリヤの女は五人の夫を取換えた賤しい婦人であつたが、用ゐられて其の村の人達を信仰に導く手引となり、七つの悪鬼に憑れて居つたマグダラのマリヤは亦、誰よりも先に主の復活を拜み、之を弟子達に告知する役目を仰せ付つたといふことである。此の如く耶蘇はどんな悪人をも、無學無能の人をも、拾ひ上げて之を聖別し、何ぞの御役に立たせ給ふ御方である。

第六、耶蘇は彼等の爲に己が身を與へ給うた。耶蘇の死は世界萬民の爲である。併し乍ら殊に世の頼邊なき弱者の爲であつたと謂うて差支ない。耶蘇が取税人の長ザアカイの家に立寄り給ふのを見て「彼は罪人の家に入りて客となれり」と呟く者があると、答へて「人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲なり」と仰せられた。耶蘇は「失せたる者」と「いと小さき者」と「小き者」の濟度の爲に、其の身を擲ち給うたのである。今も此の世の弱者が一番に需むる所の者は、金でなく、口品物でなく、異見でも亦講釋でもなくて、唯人である。人の獻身的の愛情である。

「真正の慈善は人に金品を與へることではなくて、其の身を與へることである。」而して耶蘇は、世の貧民弱者の爲に其の身を與ふる者の、魁となり給うたことを知らねばならぬ。

第七、最後に耶蘇は、其の以來今日迄、引續同じ精神を承け繼いで、世の弱者の爲に働く人物を起して居給ふ。即ちジョン・ハワードが刑務所改良の爲に起ちたるも、神父ダミエンが癩病人の爲に死にたるも、ナイチンゲール嬢が傷病兵の爲に盡瘁したるも、將又救世軍の大將ウイリアム・ブリスが、貧民の救の爲に身を擲ちたるも、悉く皆耶蘇の靈に動かされ、其の模範に倣ひ、又其の御教訓を實地に行うたものに外ならない。耶蘇は眞に貧民弱者の無二の友にて、亦其の唯一の救主である。

第十六章 種蒔の喩

参考【マタイ傳十三章一節至二十三節】

『我譬を設けて口を開き、世の創より隠れたる事を言ひ出さん。』(マタイ三・三五)
 『自然は第二の聖書なり』といふことがある。其の意味は聖書に神様の御意を教へてある如く、自然にも亦神様の御旨が現れて居るといふのである。氣をつけて観れば、山にも、川にも、草にも、木にも、禽獸にも、石金にも、此の世にあるとあらゆる物は、皆神様の御教を説いて居る。私共が唯浮かりして居る故、それを聞取ることが出来ない迄である。耶穌基督は度々自然界に現れた神様の御旨を語り、又は自然界の事を引いて大切なる靈魂上の道理を説明し給うた。中にもガリラヤの湖の畔にて、舟の中から岸邊の群衆に教へ給うた種蒔の喩の如きは、其の最も著しきものである。今雜と其の種蒔の喩の筋を言へば、一人の農夫が麥

を播きに出た處が、播いた種の中、路の傍に落ちて天の鳥に啄まれたのがある。又土の薄き石地に落ちて、一應は生え出したが、根がない爲に日に照りつけられて枯れたのがある。又茨の中に落ちて生長はしたけれ共茨に掩はれ、實らなかつたのがある。併し別によく耕した畠地に落ちた種もあつて、それは纏て三十倍、六十倍、百倍の實を結んだといふのである。

これはどういふことを教へた譬喩談かといふに、即ち神様の御教を種、又人の心を土地に譬へて、大切なる靈魂上の道理を教へられたものである。二宮尊徳の言うたことに、『我が道は人々の心の荒蕪を開くことを本意とする。心の荒蕪一人開くる時は、土地の荒蕪は何萬町あるも憂ふるに足らぬ』とある。此の如く田畠を開墾するよりも先に大切なるは、人の心の田地を開墾することである。心の田地さへ開墾が出来れば、其の所有する田畠は自ら開墾が出来やうといふものである。同じ道理にて田畠に雜草が茂つて居るのは、其の持主の胸の中に雜草の茂

つて居ることを示すものにて、又は商人の店先が混亂し、取締がないのは、其の主人の心が混亂して取締のない證據である、と謂はれても仕方がない。兎角大切なるは、お互の心の田地の手入である。

神様の御教は種である。其の御教の種を人の心の田地に植付ける傳道の事業は、世にも高貴にして亦最も重要な働である。即ち古人の語にも、「一年の計は穀を植るにあり、十年の計は樹を植るにあり、百年の計は人を植るにあり」といふ。其の人を植るのが即ち傳道事業の本意である。これは唯百年の計といふばかりでなく、眞に永遠の世界に繋がる所の最も大切な事業である。

第一、百姓の播いた種の中、路傍に落ちたのは天の鳥に啄まれたといふことである。路傍の地面は通行人に踏れて固くなり、種の入込むべき便宜がなかつた如く、此の世の輕薄なる風俗に揉まれ、罪惡の習慣に慣れて、擦れつからしとなり、鐵面皮となり、頑固強情になり了つた人は、どんなに眞面目な宗教のお話を聞いて

ても、それが腹に入らない。右の耳から聞いて、左へ脱けてしまふ迄である。路傍の踏み固められた土は、之を和げねばならぬ。其の如く頑固強情なる人の心は、謙遜柔和になつて後に、始めて神様の御教の種が、無事に納まらうといふものである。此の路傍に落ちた種とは、出來の悪い聽聞者の事である。私共は此ういふ聽聞者であつてはならぬ。

第二、次に土の薄い石地に落ちた種は、一應生え出したれ共、根がないため、日に照りつけられて枯れたといふのである。其の如く世には鳥渡した出來心で、宗教を信仰すれ共、心の奥に根據がない故、少しく困難の事に遭ひ、又は惡口雜言の一語も聞けば、直に縮み上つて止めてしまふ者がある。昔話に或人が死んで極樂に行くと、一つの倉庫に木茸の様なものが一ばいあるから、「何ですか」と尋ねたら、「これは人間の耳である。善い事を耳にのみ聞いて行はなかつた人の、耳のみ極樂に来て、身體は地獄に墮ちたのだ」と言はれた。其の次の倉庫には又、

數の子の様なものが一ぱいあつて、『これは何ですか』と問うたら、『これは人間の舌である。善い事を口にのみ言うて身に行はなかつた人の、舌のみ極樂に来て、身體は地獄に墮ちたのだ』と言はれたといふとがある。私共の宗教は唯耳に聞き、口に語るだけのものでなく、深く心の奥に根を有つたものでなくてはならぬ。石地に落ちた種といふのは、出來の悪い求道者、又改心者の事である。私共は此んな風の求道者、或は改心者となつてはならぬ。

第三、次に茨の中に落ちた種は、茨も共に育つて之を掩うた爲に、實らなかつたといふのである。此の如く折角基督の救を受け、神様を信仰する者となりながら、然も二心にして此の世の名聞や、利益や、娛樂などを見限ること能はず、所謂神様と財貨とに兼事へ様とする人々は、到底基督者に相應しき實行の果を結ぶことが出來ない。昔禽と獸と軍をした時、蝙蝠といふ奴が巧に雙方の間に飛まはり、禽の羽振の好い時は自分も羽を廣げて禽の仲間入をし、獸の勢の好い時は

羽を縮めて鼠の親類見た様な風を装うて居ると。後に禽と獸との間に平和の談判が出來た時、『それにしても蝙蝠の仕打が憎らしい、彼の儘にして置いては他の見せしめにならぬ』といふので、雙方協議の上之を嚴罰に附し、其れ以來蝙蝠は、日中世間へ顔出がならないとなつたのだといふてある。私共は此の昔話の蝙蝠見た様な、曖昧な人物となつてはならぬ。茨の中に落ちた種といふのは、出來の悪い基督者の事である。私共は此んな風の、二心なる基督者となつてはならぬ。

第四、今一つ良き地に落ちた種は、立派に發育して、三十倍、六十倍、百倍の收穫があつたといふことである。此の如く『御言を聞き、正しき善き心にて之を守り、忍びて實を結ぶ』者は、所謂一粒萬倍の繁榮を來し、多くの罪人をさへも、自分が得たと同じ救の御恵に導くことが出来る。良き地に落ちた種といふのは、模範的の基督者の事である。私共はどうか此ういふ、忠良なる神様の軍人となり度ものである。

耶穌は此の譬喩談の中に、「耳ある者は聴くべし」と仰せられた。或時二十年も教會に出席して居る男が、臨終に其の教師に對ひ、「最少し壯健な間に、説教を聞いて置けば可つたに」と言ふ故、「貴君は二十年來、缺さず教會に出席したではないか」と訝ると、「教會には出席したが、本気で説教を聞いたことがないのが、今更残念です」と言うた。こゝに又或る商人の妻があり、集會から歸つて、「今日の説教には大變に感心しました」といふから、「どんな説教であつたか」と問ふと、「それは忘れしました」と答へた。「忘れては無駄ではないか」といふと、「然うではありません。私は説教を聞いて歸ると、直にこれ迄店で用ゐた誤魔化しの秤を折つて棄てました」と、いうたさうである。私共は神様の御教を他事と思はず、我が身に引當て、聴取る傍から之が實行に力めねばならぬ。

第十七章 奇蹟

参考「マルコ傳五章一節至二十節」

「耶穌出でて大なる群衆を見、之を憫みて其の病める者を醫し給へり。」(マタイ四・一四)

救主耶穌の御生涯に關係して、多くの奇蹟の記事がある。難病人を醫し、死人を甦へらせ、鬼を放逐し、僅のパンにて多人數を養ひ、又は海の濤を静め給うたなど、耶穌が三年餘の公の御生涯にて行ひ給うた奇蹟は、其の數が決して少くない。私共は此の不思議なる事實に就いて、どう考へたら可いであらうか。

第一、此の世の中には、今も人間の智慧判断に餘る不思議な事が多くある。米國の或る大學總長は其の弟子にむかひ、「そんな事は、今い人間に解るものでないと、斷言し得るのが、即ち學者の學者たる所以である」と言はれた。無學な人間

は自分には解らぬでも、學者に尋ねたら解るであらうと思ふことを、學者は大膽に「そんな事が解るものでない」と言へるだけの相違である。此の如くこの世には人間の智慧判断に餘ることのみ多いのであるから、神様の御獨子が態々此の世にお降りなされた時の御業に、私共の判断に及ばぬ事があつたかというて、左程怪むには及ばないのである。マホメットは、「牛が草を喰ふと、それが乳になつて出るのは、奇蹟ではないか」というた。チャンニングの言に又「森の大木を眺めた後、其の下に落ちて居る小さい實を拾ひ上げ、其の實の中に彼程の大木となるべき命が宿つて居るかと思へば、此は眞に奇蹟である」といふ意味のことがある。私共は此の不思議だらけの世に住んで、特別に耶穌の奇蹟をのみ怪むべき筈でないと思ふ。

第二、加之、古來眞實至誠の人の在る所には、往々にして尋常ならぬ不思議が行はれて居る。二宮尊徳が野州櫻町の人民の邪惡なることを憂へ、成田の不動

に行つて、三七日の斷食祈禱をして居ると、丁度其の満願の當日、櫻町人民の代表者は、尊徳の行衛を尋ねて来て、お詫を申出でたといふ話がある。眞の神様を知らない人達でさへ此うであれば、況して神様の御靈に満された人の周圍に、種々人間業として説明の出来ないことが起るのも、左程不思議はないのである。それ故ジョン・ウエスレーが説教すれば、人々は其の犯せる罪に責められて、ばたばた倒れ、まるで魔法にかゝつた様であつたといひ、又ジョージ・ミューラーが祈禱すれば、神様は響の聲に應ずる如く之に應へ給うた。大將ウイリアム・ブリスが其の初、或町にて受持つた教會には、入り来る程の人々が、皆見違ふ様な善人になつて出て来るので、人々は其の會堂の事を「人間改造所」と、綽名したといふことである。況して神様の御獨子ともあるお方が御在世の當時、其の往かゝる所に尋常ならぬ不思議が行はれたといふ位は、決して怪しい話でなく、寧ろ然うあるべき筈の事かと考へらるゝ。

第三、其の上うへに考かんがへて見みれば、不思議ふしぎなのは耶蘇イエスが爲なされた奇蹟きせきよりも、寧ろ耶蘇イエス御ご自身じしんである。ナザレの田舎大工いなかだいくであつた者が、ガリラヤの漁夫等いしらすうじんと共ともに事ことを起おこし、三年ねんかそこらエダヤの小天地せうてんちにて、貧乏人びんぼうじんや、片輪者かたわもの、又は病人びやうにんなど相手に傳道でんどうした揚句あげく、其その時代じだいの人々ひとびとの反對はんたいを受け、十字架じじかの上うへに殺ころされたといふ、其その御方おんかたの精神せいしんが今日こんにち、信仰しんかう、正義せいぎ、博愛はくあいを主義しゆぎとする一切さいいの高尙かうじやうなる運動うんどう、事業じげんの土臺つたいとなつた如ごときは、どうしても私共わたくしどもの想像さうぞうに及およばぬ所の奇蹟きせきである。預言者げんしやイザヤは耶蘇イエスの事ことを述のべて、「其その名なは奇妙きせう」というて居をるが、如何いかにも其その如ごとく、耶蘇イエス基督キリストの御生涯ごじやうがいこそは、眞しんに世界せかいあつて以來このかた、最も大なる奇蹟きせきである。即すなはち其その爲なされた一つ二つの奇蹟きせきの如ごときは、決して比較くらべにならぬ程ほど、大なる不思議ふしぎであると言いはねばならぬ。

第四、殊ことに私共わたくしども耶蘇イエスを信仰しんかうして救すくひ身に受うけた者ものから見みれば、此この靈魂たましひの救すくひいふ實驗じつげんこそは、眞しんに驚おどろくべき目前まへの奇蹟きせきである。スボルジョンは、マタイ傳でんの

著者ちやうしやマタイが、取税人しゆぜいにんであつた自分じぶんの基督キリストに救すくはれた始末しまつを、其その行なひ給たまうた奇蹟きせきの記事きじの間に載のせて居をるのに、深い意味いみがあるだらうと説まいた。或時あるとき私わたくしの知人ち人が、ハックスレーといふ學者がくしやの論文ろんぶんを讀よむと、其その中に聖書せいしよの奇蹟きせきの事ことを批評ひひやうし、殊ことに耶蘇イエスが一聯隊れんたいの惡鬼あくきに憑つかれた男おとこを助たすけ給たまうた記事きじを引ひいて、之これを惡様あしさまに論ろんじて居をるのを見みて、大なる懷疑うたがひに陥おちつた。そこへ數日すうじつ來らい其その人の世話せわにて救すくはれ、一時じは旅役者たびやくしやと迄落までおちふれたのを、今は改あらたまつて、眞面目まじめな生涯じやうがいに入はいつたばかりの親戚しんせきの者ものが訪たづねて來きた。而さうして言いふには、「今朝けさも聖書せいしよを讀よんで居をると、一人ひとりで多數たすうの惡鬼あくきに憑つかれた人を、基督キリストが救すくはれたといふ處ところがありました。が、あれは私わたくしのことです。私は全く彼あの人ひとと同じ様やうに、多數たすうの惡鬼あくきにとりつかれて居をつたのを、お蔭かげで救すくうて戴いたいたのであります」といふ話はなしをした。これを知きいて、私わたくしの知人ちじんは信仰上しんかうじやうの懷疑うたがひが一時じに釋さけた。假令たとひ不信仰ふしんかうなる學者がくしやは何なんとでも言いはゞ言いへ、耶蘇イエスは今いまも現げんに斯かく惡鬼あくきに憑つかれた者ものから惡鬼あくきを逐おひだし、罪つみに死しんだ者ものを活いかし、心こゝろ

盲人を見せしめ、靈魂上の跛者を起たしめ、其の他多くの不思議を行うてお在な
さるではないか。耶蘇の奇蹟は千九百年前の昔話でなくて、現在今日の代にも行
はれて居る事實であると、彼は今更の様に、堅固な信仰に入ることが出来たので
あつた。

第五、然らば私共は耶蘇の奇蹟に就いて、どういふ實際上の教訓を學んたら可
いかといふに、

(一) 其の第一は神様が生きて居給ふといふことである。此の世の中は盲滅法な
る自然の力の支配する所でなくて、全能なる神様の統治し給ふ世界である。『エホ
バは活く。』『神には能はざる所なし。』私共は此の活ける大能の神様を憑據に、大
膽に進んで善事を行ふことが出来る。昔ルートルが宗教改革事業の困難に疲れて
失望して居る時、其の貞節なる妻は黒い喪服を着けて傍に立ち、『神様はお死にな
さいましたか。若しさもなくば活ける神様を信仰する貴夫が、そんなに失望なさ

る筈がないではありませんか』というて、之を勵ましたのは、名高い物語である。
此の如く私共の神様は、活ける大能の神様である。

(二) 耶蘇の奇蹟は又、耶蘇の御慈愛を示すものである。『耶蘇出でて大なる群衆
を見、之を憫みて、其の病める者を醫し給へり』とあり。耶蘇の奇蹟は其の御憐
憫の結果である。其の如く救主耶蘇は、今も大なる御愛心と御同情とを以て、天
の父なる神様の前に執成し給ふ。私共は耶蘇の奇蹟を讀む時、其の奥に潜む御愛
心を認め、之を我が身に引當て、有難く感佩すべきものである。

(三) 耶蘇はしばしば『汝の信仰の如くなるべし』と、仰せられた。私共は耶蘇
の奇蹟の事を考へるに就けても、同時に信仰の力の如何に大なるものかといふこ
とを、學ばねばならぬ。奇蹟は信仰の寵兒である。私共は神様を信するが故に、
其の不思議なる恩寵と能力とを實驗することが出来る。所謂『信する者には凡て
の事なし得らるゝなり』とは、其の事ではないか。私共は奇蹟を行ひ給ふ神様に

依頼み、人間業ならぬ不思議を、今の代に行ふ者とならねばならぬ。

第十八章 生命のパン

参考【ヨハネ傳六章】

「我は生命のパンなり、我に來る者は飢ゑず。」（ヨハ六・三五）

ガリラヤ傳道中の耶蘇は、僅のパンと魚とにて五千人の多勢を養ひ給ふに及び、其の評判が頂上に達した。併し乍ら勢極まれば變ずるものである。耶蘇に對する人心の離反も、亦實に此の時に始つたことを見れば、特別に其の事實に就いてお話をする必要があると思ふ。

耶蘇はガリラヤ湖の東岸にて御傳道になつた際、時間を忘れて有難い御教を聞取れた群衆が、やがてそろく空腹を覺え始むる様子を御覽になり、お弟子の一人なるピリポに、「何處からパンを買うて來て、此の多人數を養ふべきか」と、お尋になつた。別に爲すべき所を知らながら、態と斯は問試み給うたのである。答

へて『金五六拾圓のパンを買うたとしても、これ程の多人數には尙不足かと存じ
まする』と言うて居る所へ、同じく弟子の一人なるアンデルが来て、『茲に一人
の童子が、大麥のパン五箇と小魚二つとを持って居り、お役に立つなら皆差出
し度というて居りますが』と言ふのを聞いて、耶穌は『兎も角、群衆を坐らせよ』
と仰せられる故、その通にすると、丁度五千人程青草の上に坐つた。耶穌は彼の
童子が差出した五箇のパンと、二つの小魚とを取り、神様に感謝して後これを
頷たせ給ふに、不思議なる哉、其の五箇のパンと二つの魚とは、分ければ分ける
程幾らでも殖えて、皆食飽さる程に澤山になつた。そこで耶穌は弟子達に命
じ、少しも失はぬ様殘の屑を拾はせ給ふと、それだけでも十二の籠に一ぱいにな
つた。

集りたる人々は此の不思議なる御業を見、『これこそかねがね待望んで居つた預
言者の、出現せられたものに相違ない』と、耶穌を擁立て、王様にしやうとす

る氣色があるのを觀て取り、耶穌は直に人を避けて山に入り、祈禱に時を過し給
うた。斯て山から下りになつた頃は、丁度弟子達が湖水の上で難船し、當惑
し切つて居るところ故、水の上を歩いて往つて、之を助けておやりなされた。

其の翌日カペナウムに歸り、後をつけて來た多人數に對ひ、『汝等は昨日パンを
食つたからというて、後に附いてまはるのでは役に立たない。胃腑を充すパンよ
りも必要なるは生命のパンである。即ち靈魂を養ふ糧である。而して斯くいふ我
こそは、其の生命のパンである、天より降りし生けるパンであるぞ』と、お説き
になると、人々は呆れて、『此の人が何で其の肉を我々に食べさすことが出来るも
のか』といふ様な調子で、切角昨日、頂上迄登りつめた耶穌に對する人望は、此
の時から一時に下り坂にむかひ、群衆が失望して去つたのみかは、一旦信者にな
つて耶穌に従うた者さへ、何時しか其の家に歸り、御一緒にお伴をして歩く者の
數が急に減つた。そこで耶穌は其の弟子達に『汝等も亦去らんとするか』と、

お尋ねになると。ペテロは答へて、『主よ私共はあなたを離れて、誰に往きませうか。永遠の生命の言を有ら給ふ者は、唯あなたのみではありませぬか』と、いうたのである。

第一、今私共は此のパンの奇蹟に就いて、其の奥に潜む教訓を尋ねて見るに、
(一) 其の當時空腹で食を求むる者は多いにも拘らず、之を養ふべき食物は、不足處ではない、殆ど皆無であつた如く、今も私共の目の前に見る靈魂の世界の有様は、丁度其の通である。『主エホバ言ひ給ふ、視よ日至らんとす。我饑饉を此の國におくらん。是はパンの乏しきに非ず、水に渴くにあらず、エホバの言を聽くことの饑饉なり』と。私共は此の靈魂上の大饑饉に對し、どういふ處置をしたら可いであらうか。

(二) 耶蘇は一童子が、惜氣なく獻げた五箇のパンと、二つの小き魚とを利用し、これに由つて不思議に五千人を養ひ給うた。其の如く私共の智慧、力量、才能、財産等は假令甚だ僅であつても、それを全然耶蘇の御手に差上げさへすれば、耶蘇は聖別して意外の御用に立たせ給ふ。私共はこゝに銘々の獻身に就いての、面白き寓意を發見することが出来る。

(三) 耶蘇は神様に感謝して後、パンと魚とを人々に頒たせ給うた。私共は亦三度の食事を戴く度に神様の御恵を記憶し、其の都度感謝して箸を取る様でなくてはならぬ。『さらば食ふにも飲むにも、何事をなすにも、凡て神の榮を顯す様にせよ。』

(四) パンと魚とは多人數に頒てば頒つ程殖えた。それと同じ様に、神様の御恵は之を他人に與へれば與へる程、増すものである。人を教ふれば一層人を教ふる智慧が出で、人を救へば一層人を救ふ力が増す。『之を用ゆれば虎となり、用ゐざれば鼠となる』とは、其の事をいうたものではないか。

(五) 五箇のパンと二つの魚とで、五千人を養ふ力のある耶蘇は、少しも失はざ

る様残の屑を拾はせ給うた。宗教と經濟とは立派に調和を保つべきものである。私共は自分の爲にはパンの屑を拾ふほどの儉約をしながら、人助けの爲には全財産をも惜まぬ博愛の精神がなくてはならぬ。

第二、耶蘇はパンの奇蹟を見て、感動に堪へ兼ねる群衆を離れ、獨り靜に山に入つて神様に祈禱し給うた。

(一)これは耶蘇を王としやうとする、間違つた思慮を挫く爲であつた。世の人の煽動に乗らず、冷然として得意の時に處し給ふ耶蘇の御行動は、眞に床しいではないか。

(二)これは又一つの行動が濟んだ後に、更に新しき運動に響ふ準備を調へる所であつた。其の如く私共は物事の始に神様に祈るのみならず、亦物事の終に神様に祈り、更に新しき元氣精神を用意して、其の次の行動に取りかゝる様でありたい。

(三)斯て後、耶蘇は山を下つて、湖水の上に惱める弟子達を救ひ給うた。此の如く私共も亦山中の祈禱で得た力を用ゐて、海上の遭難者を濟度せねばならぬ。又は密室で神様から戴いた御恵を携へ、出でゆきて罪と禍とに惱める同胞を祝福せねばならぬ。

第三、耶蘇はパンの奇蹟の翌日、生命のパンの事を人々に教へ、而して、『我は生命のパン也』と仰せられた。今其の意味を考へて見るに、

(一)所謂生命のパンは食パンである、菓子パンではない。宗教は閑人の趣味や娛樂の爲ではなくて、人間の世渡に絶対必要のものである。耶蘇は三度の食事と同じく、私共に無くて叶はぬ所の靈魂上の糧である。

(二)次にパンは藥ではない。耶蘇は靈魂上の大醫として、どんな悪人も醫して善人とならせ給ふ。併し乍ら耶蘇は唯悪人を救ふだけでなく、反つて善人をして愈々善事を行ひ、進んで神様の軍隊の勇敢なる戰士たるに至らせ給ふものであ

る。耶穌は罪人を醫す藥であるのみならず、それよりも以上に、醫された後の私共を養ふ靈魂上の糧で在し給ふ。

(二)バンはまた魚ではない。私共が靈の生命を養ふ副食物の如きものは數多くあらうが、その主要の食物というては唯耶穌ばかりである。私共は年が年中、明けても暮れても、唯此の救主耶穌をのみ、我が生命の主として之に依頼まねばならぬ。

第十九章 變貌山

参考「ルカ傳九章二十八節至四十三節」

「これは我が選びたる子なり、汝等之に聽け。」(ルカ九・三五)

カイザリヤ・ピリピの北にヘルモン山といふ高山がある。海拔九千四百尺、夏と雖も其の頂上に雪の消えた例がない。耶穌はペテロ、ヤコブ、ヨハネの三弟子を連れて、或夜祈禱の爲に此の山に登り給うた。多分頂上迄登られたのではない。半腹の然るべき處を見立て、そこに静に神様に交り給うたものと見える。祈禱をして居給ふ間に、其のお顔の容は平常と變り、日の如く輝いて、其の御衣服は白く光つた。而してモーセとエリヤとの兩人が其の場に現れ、耶穌が程なく、エルサレムにて惡人原の手にかゝり、殺され給ふべきことなど談合ふのであつた。三人のお弟子等は旅の疲勞にて最初の間は寢て居つたが、不圖目をさまし、此の

有様を見て喫驚した。其の時ペテロは耶蘇にむかひ、「こゝに三つの小舎を設け、一つは主のため、一つはモーセのため、一つはエリヤの爲に用ゆることとし、此の儘いつ迄もお留りなされては如何でせうか」と、お尋ねした。もとより咄嗟の間に思付いた儘を申述べたので、別段深く考へての上の言ではなかつた。折しも白雲がたなびいて、其のお姿を蔽ひ隠した故、お弟子等は懼をなして居ると、雲の中から聲ありて、「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり、汝等之に聽け。」といふかと思へば、忽ち雲霽れて、そこには唯耶蘇のみ一人在し給うた。翌日耶蘇が三人のお弟子を連れて山を下り給ふ時、麓では後に残されたお弟子等が、癩癩持の一少年を癒さうとして、いつになく失敗し、當惑し切つて居る處であつた故、「あゝ信なき曲れる代なる哉、我いつ迄汝等と偕に居らん。いつまで汝等を忍ばん。その子を我に連れ來れ」と言ひつゝ、直に之を癒しておやりなされた。

私共が此の變貌山の物語に就いて考ふべきことは、第一、此の時耶蘇は祈禱の

爲に登山し給うたといふことである。耶蘇は神様の御子ではあつたが、人間の姿をとつて此の世に來り給うた以上、眞の人の子として、始終天の父なる神様に祈禱し給うたのである。聖書にのこつて居る耶蘇の御一代記を讀んで、最も目に一つは、其の如何に度々祈禱の爲に山に登り、又は海邊に往き給うたかといふ事である。其の如く私共も亦、平生祈禱をつとめねばならぬ。「汝は祈る時、己が部屋に入り、戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給ふ汝の父は報い給はん。」私共が世に對して力がないのは、神様の前に力がないからである。私共が人を動かすことの出来ないわけは、先づ神様を動かすをしないからである。私共はもつとく、人を避けて神様に祈ることを力めねばならぬ。耶蘇は此の時其の選りぬきのお弟子達三人を連れて行つて、共に神様に祈り給うた。此の如く同じ信仰を有ち、同じ目的を抱く同志の友達が、一つに寄つて神様に祈るのは、眞に楽しいものである。亦最も益あることである。耶蘇も他の場合に其の

事を教へて、『若し汝等の中二人、何にても求むる事につき、地にて心を一つにせば、天に在す吾が父は之を成し給ふべし。二三人わが名によりて集る處には、我も其の中に在るなり』と、仰せられて居る。

第二、耶穌は祈禱の中に其の御姿が變り給うた。舊約聖書に、モーセが、四十日四十夜山に入つて神様と交り、下山した時には其の顔が輝いて、見る人が眩く覺えたといふのも、思合されるのである。併し乍ら『モーセのは唯、神様の御威光を其の顔に反射した迄である。即ち月が太陽の光を反射する様なものであつた。けれ共耶穌は其の御自分の中にある光を、外に放ち給うたのである。即ち太陽が光を放つ様なものであつた』と、いうた人がある。成程然ういふわけのものであらう。兎もあれ、祈禱は人の身に光輝を放たしめるものである。曾ては罪に穢れ、惡に染んで居つた私共さへ、祈禱に由つて神様に近づき、神様と物言ひ、神様との親き御交際に入ることに由つて、其の神々しき御徳に化さるゝことが出来る。

『我等皆面怖なくして鏡に映る如く主の榮光を見、榮光より榮光に進み、主たる御靈によりて、主と同じ像に化するなり』とは、此の事である。

第三、ペテロは睡眠からさめて、耶穌がモーセ、エリヤと、聖き御物語をなし給ふ状態を見、出来ることならそこに三つの小舎を設け、お三人が其の儘に長く留られんことを願出でた。併しながらそれは固より、神様の御旨に適ふ願でなかつた。山の上で靜に天の父様と交り、又は古人を尙友するのは樂いとであれど、それと同時に私共は亦、山の麓にて、現在罪と禍とに苦む同胞のあることを忘れてはならぬ。私共は此の世ながらに凡ての罪と縁を切り、神様と偕に在る、所謂聖潔の恵を樂んで居るべき者である。併し乍ら私共の聖潔は又、所謂戰爭的の聖潔でなくてはならぬ。自分のみ聖き神様の恵を私するのでなく、反つて勇往邁進、我を忘れて世の人の救の爲に戦ふ種類の聖潔でなくてはならぬ。私共は唯いつ迄も、山の中の靜な祈禱の時をのみ、樂んで居るわけには行かないのである。

第四、聲は雲より出で、「これは我が愛しむ子、我が悦ぶ者なり、汝等之に聽け」といふ事であつた。而して其の時は律法を代表するモーセも、預言者を代表するエリヤも、早や居なくなつて、唯耶穌のみ一人、そこに在し給うたといふ事である。此の如く釋迦や、孔子や、マホメットや、其の他さまざまの聖人君子は世に現れ、何れもそれぞれ世の人を教へ導いて、大層の功德をせられたに相違なければ、然も世界萬國の人民が、最後に其の御膝下に坐つて教を受くべき方は、唯神様の御獨子耶穌基督御一人である。「神昔は預言者により、多くに分ち、多くの方法を以て先祖達に語り給ひしが、この末の世には御子によりて我等に語り給へり」といふのは、其の事である。耶穌は神様が最後に、此の世の人を救はしめんため、遣し給うた眞の救主である。

第五、耶穌は山から下りて、後に留られたお弟子等の、持餘して居る難病人を癒し給うた。斯して難病人と其の親とが助かつたのは勿論、お弟子等の顔も立ち、

反對者の口をも噤しめて、あらゆる問題は悉く解決せられたのであつた。或人の書いたものに此ういふことがある。「私が學者に、其の欲しいもの三つを尋ねた處が、「書物と健康と静な書齋とである」と答へた。私が金持に、同じ事を尋ねると、「一にも金、二にも金、三にも金である」と答へた。貧乏人に尋ねると、「一にもパン、二にもパン、三にもパンである」と答へた。酒飲に尋ねると、「一にも酒、二にも酒、三にも酒である」と答へた。一般の世人に尋ねると、「財産である、名譽である、歡樂である」などと答へた。最後に一人の貧くして篤信なる基督者に尋ねると、答へて「それは基督を見出す事と、基督に似る事と、基督と偕に在る事とである」というた」と。此の如く眞面目に神様を信ずる私共に取つては、耶穌基督は私共の一切である。私共は唯耶穌をさへ我が有とすれば、それにて事足るのである。何故かといふに、耶穌は私共の有ゆる問題を解決し給ふ方だからである。

第二十章 活ける神の子

参考【マタイ傳十六章十三節至二十三節】

『汝は基督、活ける神の子なり。』（マター一六・二六）

耶穌は北方のピリポ・カイザリヤといふ地方へ出かけの途中、其のお弟子達に對ひ、「一體、世間では、我がことを何と評判して居るか」と、お尋ねになると、答へて『古の預言者エリヤか、又はエリシヤの再來であらうといふ者もあり、或は先頃惡王ヘロデ・アンテバスの爲に殺害せられた、バプテスマのヨハネが 甦つたのであらうなど、種々御噂申上げて居ります』というた。すると耶穌は、『それでは汝等は、我がことを何と言ふか』と、お尋ねになると。氣早のペテロは眞先に答へて、『汝は基督、活ける神の子なり』と申上げた。これは耶穌が尋常のお方でなく、實は神様から遣された其の御獨子、世の救主であるとの意である。耶穌

は此の御返事を聞いて、満足に思召され、『これ全く人間の智慧分別にて考へ出したことではなく、天の父なる神様が示し給うたのである。汝の名はペテロ、即ち巖といふ意味であるが、名詮自稱、汝は此の、耶穌は基督、活ける神の子なりといふ大盤石の信念の上に、基督の教會を打建つ可きものぞ』と、仰せられた。この頃から耶穌は又其のお弟子達に、御自分が程なくエルサレムにて、長老、祭司長、學者等より迫害を蒙り、殺されて三日目に甦へるべきことを示し給ふと、ペテロが引きとめて之を諫め様とする故、耶穌はふり反つてペテロを戒め、『サタンよ、我が後に退け、汝はわが躓物である。汝は神様の事を思はず、反つて人の事を思つて居るのである』というて、これをお叱りになつた。

今此の事實に就いて私共の學ぶべきことは、第一、今も昔と同じ様に、耶穌の御人格に就いて、世間に種々なる異説のあることである。即ち或人は耶穌を唯大聖人であるといひ、或人は大教師であるといひ、或人は又宗教上の大天才である

などといふ。併しながら私共はペテロと同じく、耶穌を基督、活ける神の子なりと信仰してのみ、安心して我が身と靈魂とを、其の御手に任せ奉つることが出来るのである。或る學者の説に、「難破して沈みかゝつた汽船の船客が、若し其の船の危険を悟らず、又は切角用意せられた救命船の效用を信ぜずして、其の儘船室に留つたならばどうであらう。耶穌の基督たることを信ぜずして、其の御救に頼らぬ者の運命も亦、之と似た處がある」というてある。氣を付けねばならないことである。

第二、ペテロは耶穌のことを、「汝は基督、活ける神の子なり」と告白した。基督といふ語の意味は「受膏者」即ち膏を注がれた者といふことで、ユダヤの國では預言者と、祭司と、王と、此の三つの大切な役を勤める人だけ、就任式の時、頭に膏を注いで之を任命する風があつた。而して救主耶穌は神様から聖靈の膏を注がれ、預言者と、祭司と、王と、三つの大切なる役目を、お一人に兼ねたお方である。

ある故、之を基督、即ち膏を注がれたお方と呼び奉るのである。

(一) 然らば耶穌はどうして預言者であるかといふに、昔の預言者は神様の御旨を其の時代の人々に告げ示した如く、耶穌は隠れたる神様の奥義を、世界の人類に顯し給うたからである。即ち神様が人間の父上であること、人間が其の子であること、子は子ながら罪を犯して放蕩息子の子になつて居るのを、神様が獨子を遣つて救ひ給ふこと、罪から救はれた者は神様の御靈を胸に宿し、愛の人となつて、天國を此の世に打建ん爲に働く者となること、又死んだ先では限なき榮の御國に入れらるゝことなど、世の始から隠れたる、最も大切なる神様の奥義を、耶穌は明かに世界萬民に告げ示し給うたのである。

(二) 耶穌はどうして祭司であるかといふに、それは、昔の祭司が羔を殺して犠牲となし、これを神様に捧げて人民の罪の赦を祈つた如く、耶穌は其の貴き御體を十字架にかけ、血汐を流して世界萬民の罪を贖ひ、これを神様の前に執成し給

よからである。

(三) 耶蘇はどうして王であるかといふに、王は其の國家を統治する如く、耶蘇は人の心を支配し給ふ、靈魂の世界の支配者だからである。私共は自分勝手の世界を渡すことを止め、耶蘇の心を心とし、唯其の思召の儘をのみこれ行ふ人間とならねばならぬ。『基督の御靈なき者は、基督に屬する者にあらず』とは、その事である。

耶蘇は基督、活ける神様の御獨子である。私共に取つて預言者と、祭司と、王と、三つの大切なる務を、一人で行ひ給ふ御方である。此うした有難い救主を世に賜うた、神様の御恵は、忝けないことの至である。

第三、耶蘇はペテロの御返事を聞いて満足に思召され、これ『全く人間の智慧分別にて考へ出したことではなく、天の父なる神様が示し給うたのである』と、仰せられた。耶蘇が神様の御獨子である、救主でありでなさるといふ信仰は、聖書の

御教訓に由り、學問上の道理に由り、種々説明のしやうもあることながら、最後に大切なるは直接に我が心の奥に、天の父なる神様の御啓示を戴くことである。

私共が罪から救はれ、心を潔められて、活ける神様の御靈を胸に宿す様になれば、耶蘇が神様の御獨子であり、又救主でありでなさる事實が、最早確實にして寸分疑ふことの出来ない、實驗上の信念となつて參る。『神の御靈に感じて語る者は、誰も「耶蘇は誑はるべき者なり」と言はず、又聖靈に感ぜざれば、誰も「耶蘇は主なり」と言ふ能はず』とあるのは、此の意である。

第四、耶蘇はペテロが其の巖といふ意味の名前の如く、確實強固なる神様の僕として、耶蘇を神様の御獨子、又救主と信ずる大磐石の信念の上に、基督の教會を打建つ可きことを命じ給うた。風に吹散らさるゝ穀殻の如き基督者、砂の繩を纏うたに似て纏りのない基督教團體が、幾ら數多く出来たかというて、役に立つ者でない。私共は堅固なること巖の如き、頼み甲斐ある神様の軍人とならねばな

らぬ。又神様の御獨子、耶蘇の救を土臺とする、堅實強固なる其の軍隊を打建ん爲に力を盡さねばならぬ。『既に置きたる基の外は、誰も据うることを能はず、この基は即ち耶蘇基督なり。』

第五、耶蘇はペテロの此の告白を聞いて後、御自分が程なくエルサレムにて、長老、祭司長、學者等より迫害を蒙り、殺されて三日目に甦るべきことを、示しはじめ給うた。これはお弟子達の諒解に苦む御物語であつた。神様の御獨子が人手にかゝつて殺され給ふとか、そんなことがあつて堪るものではないと。そこでペテロは例に由り、眞先に進み出て諫め様とすると、耶蘇は之を叱つて、『サタンよ、我が後に退け云々』と、仰せられた。世界人類の救は、十字架なしに遂げらるべきものではないのである。神様の御獨子耶蘇の貴き贖罪の血に由りてのみ、罪に死にたる世の人の、新しき命を授けらるべき道が開けたのである。今日の私共も亦、榮の冕は唯十字架を経て後に受くべきものである道理を悟り、耶蘇の榮

に與らん爲に、先づ其の苦難に與る覺悟を定めて、世の救の爲に戦ふ様でなくてはならぬ。

第二十一章 不義者

参考【ヨハネ傳八章一節至十一節】

「汝等の中、罪なき者先づ石を擲て。」（ヨハ八・七）

ユダヤの三大國祭の一つなる假廬の祭の時に、耶蘇は隱にエルサレムに上り、祭の半頃から終へかけ、神殿にて人民を教へ給うた。中には感心して之を聽き、歸依の心を起す者もあつたが、一方では又其の眞直なる御教と、神々しき御人格とを煙たがり、これに反對迫害を試むる者も、段々に殖えて來た。

或朝早く耶蘇は神殿に行き、坐つて人民を教へてお在になると、そこへ頑固一遍のバリサイ宗徒だの、又は曲學阿世の學者だの、いふ連中が、不義をした一人の女を引立て、訴に來た。元來モーセの律法に由れば、姦淫罪を犯した者は男女共に之を殺してしまふ規定であれど、此の頃ユダヤは羅馬の屬國となつて居た

故、其の總督の許なしには勝手に人を殺すことが出來なかつた。そこで平生耶蘇を敵視する學者とバリサイ宗の信者とは、此の不義した女を種に耶蘇を陥れ様と試みたのである。即ち耶蘇が若し其の女を殺せと言はれたならば、これは總督の權威を無視するものとして表沙汰にしやう、若し又殺すに及ばずと言はれたならば、これはモーセの律法を破棄するものとして人民を煽動し、之に危害を加へしむるに屈強の材料であると、彼等は此うした奸計をめぐらしつゝ、女を引立て、耶蘇に訴に來たのである。

學者とバリサイ宗の連中とは、「師よ、此の女は姦淫の折、現場で執へられた者であります。モーセの律法には、此の如き者を石にて擊殺せと命じてありますが、あなたは何と言はれますか」と、問うたけれ共、耶蘇は相手にせず、黙つて地に物を書いて居給うた。頻りに之を問ふに及んで、耶蘇は其のお顔を擡げ、「汝等の中、罪なき者先づ石を擲て」と宣ひ、復び身を屈めて地に物を書いてお在になると、

訴に來た者共は其の良心に責められ、年寄から始めて壯年迄、一人一人、いつの間にか其の場を去り行き、後には唯耶蘇と其の婦人とのみを残した。耶蘇は其の女に「汝を訴に來た者共は何處へ往つたか、汝の罪を定める者はないか」と、お尋ねになると、女は「主よ、誰もありません」というた。そこで耶蘇は「我も汝を罪せじ、往け、この後ふたゝび罪を犯すな」と、諭したる後、之をお返になつたのである。

此の物語に就いて注意すべきことは、第一、學者とパリサイ宗の人達とが、自分の罪を棚に上げて、他人を責むることのみ嚴重であつた様に、人は何時も、兎角己が目にある梁木を忘れて、他人の目にある塵埃の詮議立をしたがるものだ、といふ事である。或る印度人の説教者が言ふには、「諸君は何時でも自分の事を棚に上げて、他人の身の上のみ詮議して居られる。即ち何か悪い事をとがめられると、彼は甲に適切なる訓戒であるとなづき、何か善い事を勧められると、此は

乙の身に當嵌る勸告であると合點する。斯て何を聞いても他人の事とばかり受取つて、絶えて我が身に引當て考へることをしない故、諸君は餘り深切過ぎて到底天國に入る資格がないのである」と、いうた。深切過ぎて天國に入れないといふのは、變な説き方のやうであれど、其の言ふ所に亦大に道理のあることは疑がない。「偽善者よ、先づ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵をとりのぞき得ん。」

第二、殊に男女間の問題に就いては、男子が兎角其の罪惡の責任を婦人にのみ負せ、自分共は何喰ぬ顔で過さうとする惡風がある。モーセの律法に由れば、姦淫罪を犯した者は男女共に之を殺せとあるに、學者とパリサイ宗の人達とは、何故相手の男子を取遁して、唯婦人をのみ引立て、來たであらうか。併しながらこれは唯昔の學者とパリサイ宗の人達とばかりでなく、今日も尙始終私共の周圍に見受ける所の事實である。即ち男子は其の穢らはしき獸慾を擅まにせんため、婦人

を欺き、婦人を陥れ、之を辱めて、其の終生を誤らせて置きながら、世間に對しては一切の罪責を悉く婦人に歸し、自分共は一向無責任に、それでも立派な男子、體面ある紳士の様な顔して、世を渡らうとする如き輩が甚だ多い。果は法律の文面に迄も全く男女を區別し、婦人に嚴にして男子に寛に、婦人には男子に優りたる徳操を要求し、男子は反つて公に不品行不行狀を行ふ餘地を保存する如き、不公平にして卑怯未練な真似をして居るのである。どういふ淺ましいことであらう。耶蘇は鐵面皮にして恥を知らざる學者と、パリサイ宗の人達とを目の前に控へ、面を俯し身を屈めた儘、地に物を書いて居給うたといふことであるが、同じ耶蘇は又今時の、自分勝手な真似のみして、弱き女性を侮辱しながら、巧に自ら免れて居る卑屈な男子に對して、どういふ風にお感じになるであらうか。

第三、併しながら人には皆、神様から授けられた良心といふものがある。耶蘇が『汝等の中罪なき者先づ石を擲て』と仰せられた時、之を訴に來た人々は皆自

ら省みた。自分は果して罪を犯した覺のない者として、此の女に石を投げる事が出来るであらうかと。然るに良心は人をして臆病ならしめるものである。人は自分で自分の姿を本心の鏡に映して見る時、其の醜い罪惡に心付かぬものはない故、彼等は心苦しく感じ始めた。果は多年罪の生活を續けて居る年寄から始めて、壯年に至る迄、一人又一人、いつの間にか其の場を外して去り行き、後には唯耶蘇と其の婦人とだけを残したといふのである。此の如く人は自ら省みることが必要である。省れば即ち、善心が生ずるものである。私共は平生良心に責なき世渡をする様になつて、始めて神様の前に一人前の人間となる事が出来るのである。大將ウイリアム・ブリスの言に、『私は毎日三度宛 自ら省る。即ち日中には「今朝何の善事をなしたりや」と問ひ、夕方には「午後何の善事をなしたりや」と問ひ、夜分には又、「今夜何の善事をなしたりや」と問ふのである」と、いうてある。これは私共にとつて最も好き模範であると謂はねばならぬ。

第四、それと同時に、私共は耶蘇が、罪を犯せる婦人を憐み給うた事實に注意せねばならぬ。大方此の婦人は先頃の假廬の祭の最中、飲んで食つて楽しんで居る間に、良らぬ男子に道ならぬことを言寄られ、これを拒絶し切るだけの強い意志と信念とを缺ぎ、つひ情實にからまれて、飛だ汚行に陥つたものと察せられる。其の罪に陥つた事情は兎もあれ、罪はどこ迄も罪である。しかし之を人中に曳きまはして辱めたからというて、それが婦人を懲しめる力はなく、反つて之を自暴自棄に至らしめる恐があるばかりである。それ故に耶蘇は其の婦人を憐み給うた。其の良らぬ男子の獸慾の犠牲となり、又其の玩弄物となつた果敢なき運命を憐み、之を懲しめるよりは、寧ろ之を改心させ度と思召したのである。「我も汝を罪せじ、往け、この後再び罪を犯すな」と。此の同情ある御言は慥に罪に穢れた一人の婦人を救うて、以來清き女性とならしめたに相違あるまひと思ふ。亦忝けな

いことではないか。

第二十二章 善きサマリヤ人

参考【ルカ傳十章二十五節至三十七節】

『己の如く汝の隣を愛すべし。』（ルカ一〇・二七）

假廬の祭の後、耶蘇は曩にヨハネがバプテスマを施して居つたペレヤ地方に退き、三ヶ月ばかり傳道に従事し給うた。其の間に七十人の弟子を其の邊に派遣して、福音を傳へさせ給うた様な事實もある。それから烏渡宮潔の祭にエルサレムに上り、復ペレヤに歸り、最後の上京迄、そこに留まられたものと見える。

此の頃一人の教法師が、耶蘇を試みん爲に訪ねて来て、「師よ、我永遠の生命を嗣く爲には、何をなすべき乎」と問うた。耶蘇は「律法には何と録してあるか」と問返し給ふと、答へて「汝心を盡し、精神を盡し、力を盡し、思を盡して、主たる汝の神を愛すべし。亦己の如く汝の隣も愛すべし」とあります。耶蘇

が仰せらるゝには、「如何にも然うである。神を愛し、人を愛することは、宗教の大主義大精神である故、それさへ實踐躬行すれば、永遠の生命を得られるのである」との、ことであつた。そこで教法師は「併しながら、此の己の如く隣を愛するといふ、隣とは一體誰のことでありませうか」と問ふと、耶蘇は乃ち一つの譬喩談を設けて、之を説明し給ふこととなつた。其の大體の筋は此うである。

或るユダヤ人が、エルサレムからエリコに至る山路を通行して居る時、追劊に出あつた。追劊は其の衣服を剝取つて之を打擲き、半殺にして去つた。そこへ或る祭司が來かゝつたが、見て見ぬ振をして通り過ぎた。次にレビ人というて、平生宗教上の世話焼をする人が來かゝつたが、これも知らぬ顔して通り過ぎた。其の後へユダヤ人からは、狗の様に輕蔑せられて居るサマリヤ人が來かゝつた。而して其の半死半生の被害者を見ると、大層氣の毒に思ひ、近より、油と酒とを其の傷に注し、これを包み、己が驢馬に乗せ、旅舎に連れ行きて之を介抱した。斯て次

の日出て行く時には、其の怪我人の爲に三四日間の宿錢を拂ひ、「それでも足りなかつたなら、今度來た時拂ふから」と言ひ置きて其處を立去つた。耶蘇は此の譬喩を語りたる後、教法師に對ひ「汝は此の三人の中、誰が追劊に遇うた者に取つて、隣を愛するの實を顯した人と思ふか」と、仰せられると、教法師は答へて「それは其の被害者に情をかけた者でありませう」といふ。耶蘇が仰せられるには、「汝も往きて其の如くせよ」と。これが有名なる、善きサマリヤ人の喩の大略である。

第一、それに就いて學ぶべきことは、耶蘇の宗教が神様と人とを愛する、愛の宗教だといふことである。耶蘇は後に他の教法師から「師よ、律法の中、何れの誠命か大なる」と問はれ、答へて「汝心を盡し、精神を盡し、思を盡し、主なる汝の神を愛すべし」といふ、これが第一にして大なる誠命である。第二に之と同じ大なる誠命は、「己の如く汝の隣を愛すべし」といふのである。昔から律法

や預言者の教へたことは、悉く皆此の二つの大なる誠命の中に含まれて居ると、仰せられたことがある。此の如く全身全力を盡して神様を愛し、又己の如く隣人を愛するは、基督の宗教の大精神である。私共は、「神は愛なり」といふ、其の神様の御靈を胸に宿すことに由りて、銘々愛の人となり、朝から晩迄、寢ても醒めても、唯神様と人とを愛する、愛の生活を営むものとならねばならぬ。此の如きものが所謂罪から潔められた生涯である。即ち己の私に死んで、基督と偕に生きる所の生涯である。

第二、こゝに『己の如く汝の隣を愛すべし』とある。『己の如く』といふのは、自分を先方の立場に置いて之を思ひやることである。即ち親は子の身になり、子は親の身になり、夫は妻の身になり、妻は夫の身になり、商人は客商の身になり、客商は商人の身になり、資本家は労働者の身になり、労働者は資本家の身になつて、お互に思ひやることをいふのである。『隣を愛する』とは、俗に『向ふ三軒兩

隣』などいふ、僅か數軒の狭い隣を愛するといふのでなく、反つてずつと廣く、荷も縁あつて出くはす程の人々は、皆隣人として之を愛せよといふ意味である。世には天下國家などと、大なることを言ひながら、其の妻子をさへ愛することの出来ない人がある。私共の愛は此の如く、唯大袈裟で、架空のものであつてはならぬ。基督が私共に要め給ふ愛は、大いけれ共亦至つて手近いものである。即ち昔から『袖ふり合ふも多少の縁』といふ如く、私共は縁あつて出くはす程の人々を、隣として愛することに由り、極めて實際的に、しかも非常に大なる愛を實行することが出来る。私共は縁あつて同じ工場に勤め、縁あつて同じ役所に出勤し、又は同じ電車に乗合せ、同じ集會に出席する程の人々を、残らず皆我が隣人として愛し、其の爲に親切を盡さねばならぬ。取分何か不幸難儀に遭うて居る人々の爲には、特別の盡力をせねばならぬ。『落ぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ。』随つて私共の隣人を愛する愛は、殊に世の頼邊なき人々に出あうた

時に、現るゝものでなくてはならぬ。

第三、善きサマリヤ人の喩を讀むに、祭司とレビ人とは平生宗教を口にする身でありながら、半死半生の怪我人を其の儘見過にした。所謂「坊主の不信心」とは此の事である。私共の宗教は、此んな風に實行を伴はないものであつてはならぬ。之に反して彼のサマリヤ人は、平生ユダヤ人から輕蔑せらるゝ身分でありながら、反つてまさかの時に本當の愛を實行したのである。即ち、

(一)善きサマリヤ人は怪我人を見て之を憫んだ。祭司とレビ人とは、半死半生の怪我人を見て、何とも思はなかつたが、善きサマリヤ人は之を憐れと覺えたのである。私共は人の難儀苦勞に同情する、柔和い心がなくてはならぬ。又罪に亡ぶる世の人を氣の毒に思ひ、其の靈魂を憂ふる熱情を有ちたきものである。

(二)善きサマリヤ人は又怪我人に近づいた。世には金持や貴顯紳士のお近づきになることを望む者は多くあれど、貧乏人、片輪者、病人、其の他凡て不幸なる

同胞に近づくことを好む者は少い。私共は世の惱める人民に近づき、其の中に入つて之を慰めいたはらねばならぬ。救主耶穌は天の位を棄てゝ人となり、然も僕の貌をとつて、世の罪人を救はん爲に身を捨て給うたではないか。

(三)善きサマリヤ人は、種々怪我人の手當をした。果は自分の馬に怪我人を乗せ、自分は徒歩して、之を宿屋に連込んだのである。私共の愛も亦此の如く、實行的のものでなくてはならぬ。私共は唯言を以て人を愛するのではなく、事實と熱誠とを以て之を愛することが大切である。

(四)善きサマリヤ人は又、金錢を惜まず、被害者の救助に盡力した。その如く私共は亦金錢を用ゐて人に善を行ふことを心がけねばならぬ。金錢の使用法は多くあれども、之を用ゐて人の靈魂を罪より救ひ、又其の肉體を諸種の禍より濟ふに優る使用法といふはない。私共はもつと無益に費す金を儉約して、之を傳道及び慈善博愛の爲に獻げることが學ばねばならぬ。

第二十三章 貞 潔

参考【マルコ傳十章一節至十二節】

「すべて色情を懐きて女を見る者は、既に心の中姦淫したる也。」(マタイ五・二八)
 パリサイ宗の信者が耶蘇の許に來り、離婚問題に就いてお尋をした。而して言ふには、「昔モーセは去状さへ書いて渡せば、妻を離縁しても可い様に教へて居りますが、それで宜しうございませうか」とのことであつた。耶蘇は答へて「決して然ういふわけのものでない。モーセは唯汝等の心のつれなきことを見て、仕方なしに然ういうて置いた迄のものである。抑々神様は天地開闢の始、一人の男と一人の女とを造り、これを夫婦にして人間の始祖とならせ給うた。一人の夫に一人の妻が連添ふことは、世の始から定められた神様の御意である。それ故人は其の父母を離れ、其の妻に合ひ、二人が一體となるべきものである。最早二人別々

のものではなくて、一體となるのである。神様の合せ給うた者は人が之を離すべきではない」と、仰せられた。

室に入り給うて後、お弟子等が引續、同じ問題に就いておたづねすると、耶蘇は更に言を添へ、「凡そその妻を出して他に娶る者は、其の妻に對して姦淫を行ふ者である。又妻が其の夫と別れて他に嫁ぐのは、これも同じく姦淫を行ふものである」と、お教になつた。

これは耶蘇が、どんなに男女間の貞潔といふことを大事と見做し給うたか、又一夫一婦の大倫を重んじて居給うたか、といふことを示す御物語である。

第一、耶蘇は天地開闢の始に、神様が一人の男と一人の女とを造り、之を人間の始祖となし給うたと、お説になつた。しかし乍らこれは唯天地開闢の大古だけでなく、今日も全く同じ御計らひである。神様は世界中、どこの國に行つて見ても、男と女との數を略同じ位に生れさせ、一夫一婦の關係が其の思召であること

を、事實の上にお示になつて居る。學者の説に由るに、大概どこの國でも、生れて来る子供は男の方が多ければ、追々育つて一人前になる頃には男女略同數に近づき、やがて年をとつて後には、女の數が男よりも多くなるものだといふことである。乃ち一人前の男と女とは、格別に其の數が相近いといふのは、是神様が一夫一婦を以て、男女間の正當なる關係と見做して居給ふ思召が、實際上の事實に現れて居るものと觀ねばならぬ。

これを人情の上から考へて見ても、一夫一婦といふ規定は、最もよく人の心に満足と與へるものである。昔妻と妾とを同じ家に住せて置いた人があり、或夜兩人が睦しさを向き合せて双六を弄ぶうち、つい其の儘假睡をしたのを見ると、其の髪の毛が蛇となつて、互に入亂れて噛合せて居つたといふ話がある。無論信用し難い傳説に過ぎないけれ共、人情は正しく此の如きものである。夫は其の全幅の愛情を一人の妻に注いでのみ、始めて其の夫たる満足を感じることが出來、

又妻は其の有らん限の誠を一人の夫に獻げてのみ、始めて其の妻たるの幸福を樂むことが出來るのである。

これを家庭の上から觀ても、清き男女が相會うて一夫一婦の關係を取結ぶ處にのみ、眞の家庭の情愛、又祝福といふものは宿るのである。昔アブラハムは「信仰の父」と呼ばるゝ聖徒であつたが、嗣子が欲いばかりに妾を容れたため、家庭の平和を破つてしまつたことがある。又其の孫のヤコブは、中々智慧のある人物ではあつたが、つい一夫多妻の家庭を作つたため、親子兄弟の間に引續、何とも言へない煩累を惹起したのである。

或時波斯の國王が英國に御滞在、時の有名なる政治家グラッドストンの金婚式に出あひ、嘆息して言はるゝ様、「グラッドストン氏は五十年の間一人の妻を守り、朕は一生のうちに五十人の妻を持つた。併し乍らその眞正の幸福はグラッドストン氏にあつて、朕にはないのである」と。それ故私共は唯一夫一婦の主義

に由りてのみ、能く健全にして幸福なる家庭を作り、亦能く健全にして幸福なる社會を組織することが出来る道理を、明かに認めねばならぬ。

神様の中に置いて、清き男女が取結ぶ一夫一婦の縁は、神聖なものである。私共は我が日本の同胞が、もつとく此の大切なる男女の關係、又結婚の問題に就いて、耶穌基督に學ぶ所があつて欲しいと、熱望して止む能はないのである。

第二、此の一夫一婦の主義は、凡て夫婦ならぬ男女の同棲に反對する。所謂「穴隙を鑽つて相窺ひ、墻を踰えて相從ふ」野合の許す可からざるは勿論、今時盛んに世に行はれて居る、内縁の夫婦などいふ如きものは、決して眞面目な人間の與すべき事でないのである。

第三、一夫一婦の主義は又、離婚に反對するものである。「合せ物は離れ物」とやらいふ諺の如く、今時の男女が後先も考へずして一緒になり、復左程の事由もなく、別話をする如きは、是結婚の神聖を穢すものである。失畜生の道ではある

か知らねど、決して眞人間の行ではないのである。聞けば日本は世界で殆んど、第一離婚の多い國であるとやら。私共は我が同胞の間に、尙もく男女の大倫に關する、神様の御旨を教へることの必要を感じる。

第四、一夫一婦の主義は又、言ふ迄もなく賣淫の制度に反對するものである。或は妾といひ、或は藝妓といひ、或は娼妓といひ、或は酌婦といふ。名は異れども、其の實は皆同じ淫賣婦である。殊に我が日本の國には婦人を借金の質にとり、否でも應でも之に淫をひさがしむる制度があり、官の公許の下に、斯る婦人を動物園の猿や熊と同様、或る一定の場所に圍うて、男子の不品行、不身持の便宜に供し、又それらの女性をして親不孝者、懶惰者、犯罪人等の玩弄物となり、身も世もあられぬ思をしながら、泣く泣く一日一日を過さしめ、それが厭なら情死の名の下に、好加減な相棒を見付けて、自殺でもしろといふ風に仕向けられて居る。眞に何ともいひ様のない、墮落し切つた世の有様である。果は日本の内地だけで

は満足出來ず、海外諸國に迄も盛んに不潔不義の犠牲となるべき我が同胞婦人を輸出し、其の數實に數萬人の多きに達して居るのである。どういふ恥づべく、又悲しむべき事實であらう。それに就けても私共は、自分等が銘々先づ耶蘇を信ずることに由りて、清き品性を維持する人物となり、進んでは同じ時代の我が同胞を、聊かなりとも、今よりは純潔高尚なる人民となさん爲に、力を盡す様でなくてはならぬ。

徳富一敬翁は八十歳を越えて後、儒教から轉じて基督教に入つた人であるが、其の言に「敵を愛する事と、一夫一婦の教とは、孔子の教になき處であつた」と、いうてある。如何にも此の一夫一婦の大倫は、救主耶蘇に由つて始めて明かに世に説示された御教である。私は又或る有力なる一婦人が、其の初基督教では女子の操と共に、男子の操といふことを教へると聞き、唯それ丈で、感激して直に基督者となる決心をせられた話を、聞いたことがある。私共は殊に今の日本に、耶蘇

が教へ給うた貞潔の道と、亦其の道を行ふ能力とを、紹介す可き必要を見るのである。

第二十四章 兒 童

參考「マルコ傳十章十三節至十六節」

「幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯の如き者の國なり。」(マテ一〇・一四)

グラッドストン氏は或時、「英國にある各種の問題を悉く合せたよりも大切な事は、基督教會の英國少年に對する關係如何といふ問題である」と、言はれたことがある。彼がどんなに、少年に宗教の大切なることを感じて居つたか、想像せらるゝではないか。耶蘇は少年を重んじ給うた。或時兒童を其の許に連れて來て、頭に手を按き、祈禱をして下さるやう、願出せるものがあると、お弟子等は之を遮り止めた。すると耶蘇は反つて其のお弟子等を叱り、「幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯の如き者の國なり。誠に汝等に告ぐ、凡そ幼兒の如くに神の

國をうくる者ならずば、之に入るに能はず」といひ、やがて兒童を抱き上げて手を其の上にあき、これを祝福してお返になつた。傳説に由れば、斯く耶蘇から祝福せられた兒童の一人が、後にイグナシアスといふ豪い宗教家となり、「劍に近づく者は神に近づくもの、又猛獸の中に在る者は神と偕に在る者也」と言うて、羅馬にて勇しき殉教者の最後を遂げたといふことである。

耶蘇は「幼兒らの我に來るを許せ」と、仰せられた。人が年をとつて種々なる罪惡を重ね、多くの良らぬ習慣に染んで後、之を救に導くのは、容易な事でない上に、假令成功した處で、それ迄幾年かの歲月は全く無益に費へてしまつたわけである。併し乍ら兒童を尙無垢な間に、早く耶蘇に導くことが出来たならば、之を將來多くの罪から救ふのみならず、亦反對に之に多くの善事を行はしむることが出来る。乃ち或人の言に、「年老たる罪人が救はれた時には、唯一箇の靈魂が救はれたのであれど、兒童が救はれた時には、一箇の靈魂と共に、亦一人の生涯が

救はれたのである」とあり、如何にも深い道理を説いたものと謂はねばならぬ。そののみならず、幼い時から早く宗教に入つた者は、中年以後に發心した人々よりも其の信仰の根據が深く、又其の人物が頼りになるものである。乃ち有名な宗教家スボルジョンの言に、「私の教會には二千七百人の會員があつて、折々除名處分をせねばならぬ様な信者を出したこともあれど、幼い時から信仰に入つた者には、まだ一人も然うした人物を出したことがない」と、いうてあるのは、大に參考すべき言である。

第一、それに就けても大切なるは、私共が兒童を神様からの預物として、大事に育てることである。我が子ながらも神様から委託せられたものとして、改めて之を神様に獻げ、神様に對する責任を感じつゝ之を養ふのは、親が其の子を育てる上に、何より肝要な心得である。昔ハミルガルは、まだ漸く九歳の我が子ハンニバルを携へて山上に祈り、其の終生羅馬を敵として戦ふべきことを約束せしめ

たが、ハンニバルは成人の後、果して偉い豪傑となり、カルセージの選兵を引具して羅馬に攻入り、之を馬の蹄に蹂躪したといふことである。又我が朝の楠正成は僅か十一歳の一子正行に遺言し、其の飽く迄も足利尊氏を敵として戦ふべきことを誓はせた處が、正行は父の志を忘れず、後終に「かへらじとかねて思へば梓弓、なき數に入る名をぞとむる」といふ歌を、如意輪堂の扉に刻み置き、往いて四條畷に潔き討死を遂げる迄、戦うたといふことである。其の如く私共は又兒童を、早くから神様と人との爲に獻げねばならぬ。幼き兒童を神様からの預物と見做し、これを唯其の御國の爲に育て上げることが、何より大切な覺悟である。

第二、隨つて兒育に肝要なるは、彼等に宗教を教へることである。其の家庭、又日曜學校等に於て、速に兒童らに宗教上の教育を授けねばならぬ。何も込入つた教理や、神學の講釋を聞かせると言ふのではない。唯神様と人との爲に私なき

生涯を營む様、其の精神さへ吹込めば可いのである。中には兒童が大きくつて、自分で信仰心を起す迄、宗教のことを教へぬでも可いといふ人があれど、それは大な心得違である。彼此して居る間に兒童は良くないことを澤山に覚え、間違つた思想を多く蓄へて、始末にをへなくなる恐がある。或人が故ブリス夫人(カサリン)に對ひ、其の家庭教育に成功せられた秘訣を尋ねると、答へて、「それは唯惡魔の先を越したゞけである。兒童が悪いことを覚えぬ以前に、早く神様の御旨を教へ込むより外に、善良なる家庭教育の秘訣といふはありませぬ」といはれた。私共は我が子を家庭で教へるのは勿論、若し出来ることなら、自分で日曜學校の一組も受持ち、他人の子たち迄、耶穌に導き度ものである。

第三、兒童を靈魂の救に導け。常に宗教の道理を教へるのみならず、之をして明かに神様に従ふ決心をなさしめ、上よりの御助と御力とを、其の心と身とに経験せしむる様に導かねばならぬ。昔から大に神様に用ゐられた信仰上の豪傑に

は、十四五歳から二十歳位迄の間に、早く救の恵を實驗した者が極めて多い。或はもつと早く七八歳から十二三歳の間に、志を立て、耶穌に従ひたる者さへ、少くないのである。

今から百四五十年前、英國のグロチエスターといふビン製造を以て名高い市に、ロバート・レックスといふ新聞記者があり、或日一工場の傍を通り、數百人の少年職工が囂々と大騒するのを見て、近所の人々に「此の兒童等は日曜日には何をして居りますか」と尋ねると、「日曜日には餘計に喧嘩をして騒ぎます。兒童等だけでなく、此の兒童等の親達も、無學文盲なものばかりで、日曜日に教會に行く者など一人もありません」といふ返事であるから、レックスは大層心を痛め、乃ち一教師を雇ひ、毎日曜日に其の兒童等を集め、無報酬で之に普通學と教理問答とを教へたが、それが聽て今の日曜學校の起原となつたのである。其の以來日曜學校の事業は、年一年と進歩して來た。勿論今日では、レックスの普通教育を

授けた趣意とは違ひ、専ら秩序立つて宗教々育を授けるやう、變遷して來たのである。紐育の判事フォーセットといふ人の言に、「去五年半の間、私が取扱うた刑事被告人の數は二千七百人にて、其の約四割二分は十六歳乃至二十歳の青年であつたが、私は彼等に其の日曜學校に出て居つたか、否やを問ひ試むるに、一人も然りと答ふる者なく、嘗て日曜學校に出た者も、今は遠ざかつて其の感化を離れて居る者ばかりであるのを發見した。私は日曜學校の効果を深く信ずる故、不良少年の刑の執行猶豫を與へる如き場合には、以來必ず日曜學校に出席すべきことを條件として、之を放免する様に心がけて居る」というてある。亦以て日曜學校の少年青年に及ぼす感化が、如何に大なるかを知るべき事實であると思ふ。

私共は「幼兒らの我に來るを許せ」と宣ふ、耶穌の御聲に聽従ひ、もつとく少年青年を救の恵に入らしめ、又他人の救の爲に起たしむるやう、先づ彼等を耶穌の御許に連れ來ることを努めねばならぬ。

第二十五章 凡ての者の僕

参考「マルコ傳十章三十五節至四十五節」

「頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし。」(マルコ一〇・四四)

昔羅馬の豪傑ポンペイは、自分以上の人物を忍ぶこと能はず、シーザーは又自分と同等の人物を容赦することが出來ないため、互に權勢を争うたといふことである。此の如く人の胸の中には、功名心又は大望といふものがあり、これを善く導けば善い方の役に立てど、間違つた方角に嚮へば、飛でもない禍を惹起す様な例が至つて多い。或時ゼベダイの子なるヤコブとヨハネとの二人は、其の母と一緒に耶穌の御前に罷出で、「少しも願事があります」といふ故、「何事か」とも尋になると、「あなたが他日志を得給はん時、何卒私共二人の中、一人はあなたの右、一人は又左に座ることをお許し下さる様、願ひ度ござりまする」というた。

耶蘇は答へて「汝等は何を願ふべきかを辨へないのである。一體汝等は我が程なく身に受けんとする世の救の爲の苦難を、一緒に忍ぶことが出来ると思ふのか」と尋になると、「無論難儀苦勞位は、幾らでも辛抱致しまする」というた。「成程難儀苦勞を辛抱する位出来るかも知れないが、我が右左に座るとは許さるべき限でない」とお答になつた。此の問答を漏れ聞きたる他の十人の弟子は、ヤコブとヨハネとが自分等を出抜かうとしたのを憤つて居ると、耶蘇は彼等を諭して宣うた。「國々の領主は其の人民を支配し、又大なる者共は人民の上に權柄をとる。これは汝等が知る通である。さり乍ら汝等の中には斯ある可からず。汝等の中大ならんと思ふ者は、汝等に役はるゝ者となり、又汝等の中頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるであらう。そは我が此の世に來りしわけも、人を役ふ爲に非ず、反つて人に役はれ、又多くの人に代り、其の命を與へて贖償とならん爲であるぞ」と、仰せられた。

私共は此の興味ある物語に就いて、二三の大切な教訓を學ばねばならぬ。
 第一、大望を有つのは悪いことでないけれ共、大切なものは其の動機を吟味する事である。耶蘇はヤコブとヨハネとに對ひ「汝等は求むる所を知らないのである」と、仰せられたが、如何にも其の如く彼等は唯漫然と、自分の立身出世を求め、己が功名手柄を願うたのであるから、其の動機が如何にも賤しかつた。彼等は唯己が私を求めたものに過ぎない。私共が若し大望を抱くならば、それは少も餘計に神様の御爲、人の爲に働かせて戴き度といふ、聖き大望でなくてはならぬ。昔ホイツトフィルドは「神様よ、何卒私を、非凡の基督者とならせ給へ」と祈つて居つた。而して神様は彼を擧げ用ゐて、世にも稀なる救靈の豪傑とならせ給うたのである。又ウイリアム・ケレトは、當時一箇の靴屋でありながら、壁の上には「神に大事を求めよ。」「神の爲に大事を企てよ。」といふ二つの標語を掲げ、然らういふつもりで忠實を盡して居つたが、神様は其の年若き靴屋を用ゐて、能く印

度傳道の先達とならせ給うた。大望を有つなら、神様の御榮を自當の大望を有ちたいものである。自分はどうかならうとも、唯世の爲、人の爲を願ふ人物を、神様は用ゐて、不思議に大なる御業をなさせ給ふのである。

第二、耶蘇はヤコブとヨハネとに對ひ、「汝等は我が程なく身に受けんとする、世の救の爲の苦難を、一緒に忍ぶことが出来ると思ふか」と、おたづねになつた。耶蘇の榮に與り度と望む者は、先づ其の苦難に與ることを覺悟せねばならぬ。昔ガリバルヂーは伊太利の愛國者であつたが、其の人民にむかひ、國の獨立を圖る必要を訴へて、「我に従ひ來れ」と叫んだ。「汝に従ふ者の報酬は何か」と、尋ねる者があると。答へて「我に従ふ者の報酬は、飢餓と、缺乏と、負傷と、而して死ぬることである」と言うたが、それにも關らず、熱誠なる伊太利人はガリバルヂーの愛國心に動かされ、起つて之に従うたといふことである。今耶蘇は亦それと同じ様に私共にむかひ、「我に従ひ來らんと思はゞ、己をすて、日々己が十字

架を負ひて我に従へ」と、叫んでお在なさる。私共は亦ガリバルヂーに従うた伊太利人以上の熱誠と眞實とを以て、此の世界人類を救ふ爲の、最も大切な、而して又光榮ある、御軍に従ふ覺悟がなくてはならぬ。

第三、耶蘇はヤコブとヨハネとを憤る十人の弟子等にむかひ、「大ならんと思ふ者は汝等の役者となり、頭たらんと思ふ者は凡ての者の僕となるであらう」と、仰せられた。「凡ての者の僕」とは、どういふ貴い語であるか。世間では一人でも餘計の人を我が爲に働かすことを、此の上もなき榮譽と心得て居るのに、耶蘇は其の反對に、一人でも餘計の人に役はれるのを、最も貴き生活であると、教へられたのである。昔の傳説に或時ペテロが耶蘇に對ひ、「主よ、私はせめて一晚だけでも、神様になつて見度ござりまする」といふと、耶蘇は、「それでは今夕一夜、お前を神様にしてやるから、なつた積で向に往け」と仰せられた。それからペテロは獨り他の弟子等を離れて行くうち、忽ち大な牧羊場に出た。見れば牧者が何

れも身支度を調べて居る様子であるから、「どこかへ往くのか」と尋ねると、「左様です、今晚は向の町にお祭があつて、出かける所があります」といふ。「それでも誰か、留守番が居なくては、狼でも来た時羊をどうするか」と尋ねると、「それはよく解つて居ますけれども、皆お祭に往き度ものばかりですから、今夕一夜の處は、全く神様任せであります」と、いうて置いて皆出で去つた。「はて神様任せと
いうたな。して見れば今夕一夜、私は神様にして戴いて居るのだから、こゝで此の羊の群の番をせねばならぬわけかな」と。ペテロは一晚だけ神様にして戴いたお蔭で、その夜は少しも眠ること能はず、羊の番をしたといふことがある。これはつまらぬ假作話に過ぎないが、それにも關らず、其の中に大な教訓がある様にも思はれる。最も神々しい人物とは、他人が飲んで食つて浮れて居る間に、自分ばかり夜の目も合はさず、頼なき羊の群を面倒見る人の事をいふのである。私共は人を役はん爲にあらず、人に役はれ、然も「凡ての者の僕」として、世の爲、人の爲に

御奉公することを、心がけねばならぬ。

第四、耶蘇は自分自身「事へらるゝ爲にあらず、反つて事ふることをなし、又多くの人の贖償として己が生命を與へん爲に」世に來たのであると、仰せられた。「人其の友の爲に己の命を棄つる、これより大なる愛はなし。」耶蘇が神様の御獨子でありながら、人間の姿をとつて世に現れ給うたのは未だしも、最後には十字架の上に血汐を流して迄も、萬民の救の大業を成遂げ給うたのである。これはどういふ大なる愛であるか。又どういふ貴き奉仕の御生涯であつたらうか。眞に生き甲斐ある世渡をなし、幾分にも世の爲人の爲に盡し度と望む者は、亦神様の御獨子、世の救主なる耶蘇に従ひ、其の御靈を胸に宿し、其の御人格にあやかり、其の救の御軍に参加し奉つる外はないのである。

第二十六章 放蕩息子

参考【ルカ傳十五章十一節至三十二節】

「悔改する一人の罪人の爲に、神の使たちの前に歡喜あるべし。」（ルカ一五・一〇）
放蕩息子の喩は、私共罪の深い人間と聖き神様との關係を、放蕩息子と、其の親
とに譬へたもので、耶蘇の御譬喩談の中でも、取分名高きものである故、今雜と
其の筋書を左に御紹介申上げたいと思ふ。

或人に子二人あり。次男が毎日の様に父に對ひ、どうか財産を分けて下されと
迫る故、父も終に拒み兼ねて、其の意に任すと、次男は幾日も經ぬうちに、貰うた
程の身代を取まとめて遠國に出かけ、放蕩三昧に浮身を窶した結果は、みる／＼
其の所持の金を皆費ひ果した。折柄其の地方に大變な饑饉があり、腕に一人前の
働のある人でさへ、活計に不自由を覺ゆる場合、況して費ふことを知つて、鑑

一文儲けることを知らない放蕩息子が、空腹い目をするに至つたのは、當前の事
ある。無理に或人に泣付き、漸とありついた仕事といふのは、豚の番人であつた。
固より腹一ぱいの物を食べらるゝ程の職務ではなし、饑に迫つて豚の食料である
青臭い蝗豆を噛み、谷川の水を掬んで無理にのみ下さうとしたことも幾度かあつ
たが、誰も情をかけて呉れる人とはなかつた。こゝに至つて流石の放蕩息子も、
始めて本氣で我が身の上を省みざるを得なかつたのである。郷里の父の許には、
食物に飽きて居る傭人さへ幾人か居るに、私は其の次男と生れながら、今日此う
した淺ましい身の上になつたのは、どういふわけか。これ皆自分の罪の爲である。
親不孝の報である。よし然らば今から父上の許に歸つて行き、面目次第もないこ
とながら、我が重ね／＼の罪のお詫を申上げ、若し許されるれば、此の後はせめて
傭人同然になりと役うて戴くのが、自分の爲すべきことであらうと。斯く決心し
たものであるから、放蕩息子は直に豚の番人を辭し、乞食の様な姿をしながら、

郷里へ旅立つことゝなつた。日を経て後、息子は漸く其のなつかしい父の家の近く迄來ると、まだ大分距離があるのに、父は目ざとくも之を認め、急ぎ馳せ來つて、其の乞食同然の姿をした我が子に抱付いたのである。息子は驚き、涙の下からお詫の言を、未だ半分しか言はないうちに、父は遮り、「もうよしよし、お前が其の氣にさへなつてくれれば、これ程有難いことはない。やれ〜行衛の知れなかつた我が子が歸り、死んだかと案じた伴が無事で戻つて來た。こんな嬉しいことが復とあらうか」と、連れ歸つて風呂に入れるやら、着物をとり換へさするやら、果は御馳走を調へてお祝の宴會を催すといふ大混雜。そこへ野良で働いて居つた長男が戻つて來て、大變に不平である。何だ、親から貰うた身代を湯水の様に費ひ果し、乞食同然の姿で歸つた親不孝者を、そんなに大騒して迎へる筈があるか。馬鹿々々しいにも程がある」と、立腹して内に入らぬ故、父は裏口迄出て來て之を宥め、漸くのこと説付けて之を家に連込んだといふ。これが放蕩息子の喩の

大體の筋である。

思ふに私共が此の譬喩談の中に、是非共注意せねばならない箇條が、少くとも三つ程ある。

第一、私共は先づ此の譬喩談の中から、神様を餘所に罪の世渡をする人々は、即ち放蕩息子であるといふ道理を學ばねばならぬ。放蕩息子は親を離れて遠國に流浪した。其の如く罪人は神様を離れて、遠く浮世の衢に彷徨ふものである。放蕩息子は親讓の身代を蕩盡した。其の如く罪人は神様から授かりたる智恵、力量、健康、財産、果は生命をさへも、無意味に濫費して居る者である。放蕩息子は困窮して居る最中、饑饉年に出あうた。其の如く罪人には禍が伴ふものである。罪人は不運の一生を送るものと定つて居る。放蕩息子は奴隸同然の境涯に落ち、豚の番人と迄成下つた。其の如く罪人は惡魔の奴隸となり、穢れた慾の僕として、悲しい月日を過す者である。放蕩息子はいなご豆を食べて空腹を忘れやうとした。